

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.284

2017年1月

平成29年 松尾総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



目次

●年頭あいさつ	
平成29年 新年を迎えて	3
●ニュース	
HeForShe セミナー「ダイバーシティと女性のリーダーシップの促進」を開催	8
名古屋大学レクチャー2016を開催	9
平成28年度秋季名古屋大学新入留学生歓迎懇談会を開催	10
東京エレクトロンと産学連携に関する協定を締結	10
永年勤続者表彰式を開催	11
タイ王国チュラポーン王女殿下が本学を訪問	11
リーディング大学院プログラム合同シンポジウムを開催	12
建物の解体に伴う防火・防災安全実験・訓練を実施	12
環境安全衛生管理室創立40周年記念講演会を開催	13
ベンチャーズトーク～名古屋大学発ベンチャー企業の集い～を開催	13
中国語スピーチコンテスト南京大学杯を開催	14
HeForShe グローバル・アイデアソンを開催	14
全学技術センター技術職員が大連理工大学を訪問	15
全学同窓会第3回講演会を開催	15
●知の先端	
細菌の付着を操る	16
堀 克敏 (大学院工学研究科教授)	
中谷 肇 (大学院工学研究科講師)	
●知の未来へ	
ナノメートルのスケールで大きく変わる触媒の性能	18
大山 順也 (大学院工学研究科助教)	
●部局ニュース	
岐阜薬科大学との基本協定書調印式を挙行	19
名古屋大学ーラクオリア創薬株式会社との合同シンポジウムを開催	19
平成28年度名古屋大学鶴舞公開講座を開催	20
中国人民大学外国語学院との部局間学術交流協定を締結	20
第18回「まちとすまいの集い」を開催	21
第66回名古屋大学博物館コンサート (NUMCo) を開催	21
●受賞者一覧	22
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年11月16日～12月15日	28
●イベントカレンダー	30
●表紙サークル紹介	31
●ちょっと名大史	
ノーベル賞受賞者が集う1960年代	32

平成29年 新年を迎えて
2017年は一人ひとりがその才能と能力をフルに発揮する年に





名古屋大学

総長 松尾 清一

新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、今後の名古屋大学を展望してみたいと思います。

私は2015年4月に総長就任後、任期中の目標をNU MIRAI 2020 (Nagoya University Matsuo Initiatives for Reform, Autonomy and Innovation 2020) としてまとめ、社会に公表しました。この中で、「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」するという目標を掲げています。そのために最先端の研究を行い世界屈指の知的成果を生み出すことや、それを支える次世代の研究者を育成することはもちろんですが、卒業生の多くは社会に出て様々な世界で活躍することから、社会貢献の高い志をもち、高度の専門性と幅広い視野に基づいて、リーダーシップを発揮できる人材、すなわち「勇気ある知識人」を育成することが重要な責務です。NU MIRAI 2020に掲げた4つの柱（教育、研究、

国際化、社会連携）を推し進めること、そしてそれを持続的継続的に実行していくための5本目の柱、財務経営・組織改革が必須であると考えています。

私の総長としての任期は最長6年ですが、ホップ、ステップ、ジャンプで例えるなら、最初の2年、ホップの時期は間もなく終わろうとしています。この間、大学の組織改革をはじめ重要な課題に取り組み、教職員の皆さんとともに全力で走ってきました。この過程で部局や教職員の皆さんとの直接対話により大学の現状をおおむね理解でき、またコミュニケーションがとれつつあることは大きな収穫でした。今年4月からはステップの時期となりますが、指定国立大学法人や卓越大学院という大きな課題、ある意味では名古屋大学の将来にかかわる重要な課題が待っています。これらは国から投げかけられた課題ではありますが、名古屋大学の戦略の中に位置付けて積極的に対応する必要



ワイツェッカーローマクラブ共同会長に名誉博士称号を授与



モンゴル国立大学・名古屋大学レジリエンス共同研究センター開所式



名古屋大学全学同窓会マレーシア支部設立



創薬科学研究館竣工記念行事

があります。とりわけ大事なことは、「将来どの様な名古屋大学にするのか」について次世代を担う層が自律的に考えるきっかけにすることです。そしてジャンプの時期には、世界に向けて大きく打って出ることができるようにしたいと、決意を新たにしています。

将来像を考えると、最近では「バックキャスト」のコンセプトが提唱されています。すなわち、目標としてあるべきビジョンを想定し、それに到達するための方策を考え、最後に必要な組織のあり方を考えます。そうすると、現状とのずれやギャップがあらゆるところで生じます。これを総合的に分析して、一つ一つ戦略的かつ計画的に埋めていくことにより目標に到達しようとするものです。指定国立大学法人のコンセプトはまさにバックキャストで考えるべきものです。10年後、20年後の名古屋大学はどうあるべきか、をまずビジョンとして共有し、それに到達するにはどうすればよいか、戦略を立て実行するのです。2017年をスタートするにあたって、ぜひ名古屋大学の総長・役員と教職員・学生など構成員一人ひとりが未来の名古屋大学のビジョンや実現方策を考え、対話により共有し、実現に向けて協調することを理想とします。以下は現時点で総長として考えている名古屋大学の未来像に向けた課題です。

NU MIRAI 2020で掲げた柱の一つは教育です。私は世界標準の教育を確立することを目標にしています。我々自身が名古屋大学で学ぶ学生の将来像をしっかりとイメージしておくこと、名古屋大学が養成する人材像を明確にして教職員が共有すること、が重要です。社会のどの様な領域に進んでも、勇気ある知識人としての資質と能力を発揮できる人材という抽象的なイメージを、具現化する必要があります。その上で、学位ポリシー>カリキュラムポリシー>アドミッションポリシーの順でバックキャスト的に3つのポリシーを一体的に改革していく必要があります。ともすれば教育は教員側の一方的な思い込みで進めがちですが、学生のニーズや考え方をしっかりと把握したうえで

物事を進めていくことが重要です。これら一連の過程は、しっかりとしたデータに基づいて設計する必要があります。そのためには教学IR(インスティテューショナル・リサーチ)という機能が必要になります。名古屋大学は国際標準の教育を掲げていますが、この観点からも広く世界の高等教育の現状を研究する必要があります。国際標準の教育に到達するには、英語能力の向上はもちろんのこと、様々な要素を考える必要があります。世界における競争力を獲得するために何が必要か、科学的に戦略を立てなければなりません。教学IRも教育の国際化も大変な労力を要する作業ですが、名古屋大学が世界の研究大学として卓越した人材を獲得し、勇気ある知識人として育成していくため、どうしても必要なものです。昨年(2016年)4月に組織改編により発足した教育基盤連携本部では、教学に関するIRを行いながら、名古屋大学全体の教育の在り方を再検討し、上記のような目標達成に挑もうとしています。

現在実施されている6つのリーディング大学院の成果を、プログラム終了後に限られた予算の中で生かす方策と、より多くの学生がその恩恵を受けられるようにする仕組みづくりが重要です。これについては、高等教育支援機構(仮称)を教養教育院に一体的に設置して、リーディング大学院で担っている共通部分の教育事業を効率的に進める構想を持っています。

研究においては、名古屋大学は21世紀に入ってから6名のノーベル賞受賞者を輩出し、国際的にもその研究力が注目されています。今後も研究大学として世界屈指の知的成果を挙げることは名古屋大学の使命であります。創造的な研究を行うためには、研究者あるいは研究グループの自由な発想に基づき、知的成果を挙げるのが原則です。研究は、物事の真理を明らかにし、新しいものを発見・創造し、社会のイノベーションや進歩に貢献していく、という極めて創造的な所作です。しかし、これを大学全体のレベルあるいは部局レベルで見ると、研究マネジメントがどうしても



フィリピンサテライトキャンパス開校式・入学式



アジア法交流館落成記念式典

必要になります。すなわち、世界屈指の研究大学の戦略と取り組みを加速させるために、国際的に競争できるコアコンピテンシーを設定し、財源・人材の確保と配分、効率的な研究推進、評価と戦略の修正、という一連のプロセス(すなわちPDCA)をしっかりと進めていく必要があります。名古屋大学では多くのコアコンピテンシー、言い換えれば高い国際競争力を持った研究者やグループ、研究領域が存在します。これらを持続的に発展させる、そしてまたこれらに続く新しい研究者やグループを育成していくことが、世界屈指の研究成果を挙げるために必要です。一方で、研究に関して厳しい取捨選択が必要になると思います。名古屋大学では様々な取り組みがすでに行われていますが、新たなステージに名古屋大学を押し上げるために、再度総点検(研究の棚卸)をして、質量ともにより高いレベルの知的成果の創出に挑む必要があります。

今後の重要課題として平成30年度から始まる卓越大学院制度では、領域を超えた連携による新しい研究領域の開拓や領域間の連携による知的成果の拡大(横の糸)、基礎から応用までの一貫した連携や研究マネジメント(縦の糸)、そして優れた博士人材に対する支援、が必要になります。これら縦横の連携と博士課程学生・ポスドク人材支援を有機的、戦略的に推進できるような柔軟な研究組織になれば、現時点からの大きな飛躍が期待できると考えます。未来に輝く日本社会を創造しけん引する中心的な人材として、卓越した博士人材の育成は名古屋大学の重要な責務であり、支援方策や博士人材のキャリアパスの確立を国や企業と協議して進めていくことは極めて重要な課題です。

以上のような研究マネジメントには、教学IRと並ぶ研究IRが必要であり、この機能に関する検討はすでに学術研究・産学官連携推進本部でURAタスクフォースプロジェクトとして始まっています。加えて重要な課題として、大学の裁量で差配できる運営費交付金など国からの基盤的経費支援は年々削減されているため、全学的な視野からの財源の配分や効率的な経費の使用、そして何よりも競

争的資金や外部資金の積極的確保が絶対的に重要です。大学全体ではIRに関して、学内及び学外の情報を収集・分析し、大学の効率的・効果的な計画立案、戦略策定及び意思決定を支援するIR本部を設置したところであり、今後の機能の充実が急務です。

国際化・多様化の意義について、改めて強調したいと思います。まず、深刻な少子化問題と大学の国際競争力の低下という現実の中で、名古屋大学に入学する学生の質を維持し高めることは容易ではなく、相当な努力をしなければ優秀な学生を取り続けることができません。その際国際化や多様化は、優秀な学生を日本及び世界からリクルートするときに大きな魅力となります。第二に、グローバル化の観点でいえば、学生は大学入学や卒業後の社会において、好むと好まざるとにかかわらず国際社会とのかかわりが余儀なくされています。グローバルな環境は日本でも当たり前前の風景になりつつあります。第三に社会的価値の創造という点では国際的な視野を持ち、多様性(国、人種、宗教、文化、性など)を理解し、受け入れ、協働することが重要です。異なる背景の人たちが協力して進める研究は、新たな人類普遍の知的成果を挙げるうえで必須であると考えています。この点で名古屋大学の特徴として男女共同参画を強力に進めてきたことは、国連からも評価されていますが、女性のエンパワーメントの意義と展望について、世界の情勢を見ながら認識やビジョンを共有することが、名古屋大学にとって大きな課題です。このような発想に立つとき、将来の名古屋大学像に照らして国際化・多様化は、未来の名古屋大学の創造に大きな示唆を与えるインパクトになります。

Top Global University(スーパーグローバル大学創成支援)事業において、名古屋大学は拠点として、目標を掲げてその実現に取り組んでいます。これは資金を取るための押し付けられた目標ではなく、名古屋大学自身が世界屈指の研究大学として成長するための自己目標である、と考え



未来材料・システム研究所設立記念式典



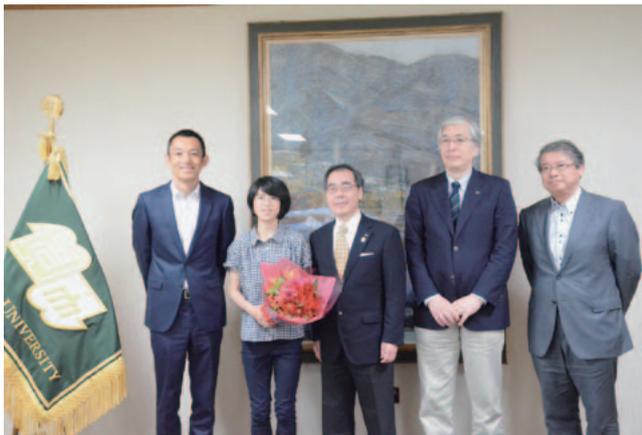
ホシザキ奨学金設立に対する感謝状贈呈式

する必要があります。この中で、名古屋大学はアジアのハブ大学になるという目標を掲げています。その心は、日本が立脚しているアジア地域の大学や研究機関、そして優秀な若手人材・学生とともに学び、世界に挑んでいく、「Study with Asia, and Challenge to the World」ということです。アジア諸国も自国やアジアだけを見ているわけではありません。世界への展開を展望しています。今後如何にアジアと協調し、一緒に世界に挑戦していくか、がキーポイントであり、世界屈指の研究大学になるという目標と何ら矛盾はなく、むしろ戦略として重要であると考えています。

名古屋大学はすでに20年以上にわたり、アジア地域との連携、人材交流・育成、共同研究などを積極的に進め、強力なネットワークを形成しています。これらは文部科学省をはじめ外部からはたいへん高い評価を得ている事業です。今後財政状況が厳しくなる中で、如何に効率化と経費削減を図るかが大きな課題ではありますが、他方でこの財産をどのように積極的に活用していくか、全学的な理解を得、また外部資金の獲得も画策しながら一層積極的な展開をしたいと考えています。上述のような意味で、現在、検討を進めているアジア共創教育研究機構（仮称）の成否は、

名古屋大学にとって極めて重要であると考えています。このことはまた、これまでの成果の上に社会科学系や融合領域系の研究科を中心に人文系や自然科学系の諸領域とも連携した「新たな価値創造のための教育研究」を展開する重要なプラットフォームになることを目指しています。

社会との連携では何といても産学（官）連携の進展が中心的な課題です。名古屋大学は、産業界（企業）や他の研究機関などと連携しながら、如何に新しい価値創造に貢献できるかが問われています。名古屋大学ではまず、研究・産学官連携を支援する部門を統一して基礎から実用化までシームレスに機能する組織改革を行いました。これによって生まれた学術研究・産学官連携推進本部は、教員の皆さんとの協働で、4年前に比べ共同研究の額を2倍、知財収入を10倍に増やすことができています。今後も高い目標を目指したいと考えています。またこのような共同研究あるいは事業は次世代産業に結び付く可能性のあるものが数多く含まれており、その意味ではそれに対応する新しい人材の育成が求められます。これから進めようとしている産学協同プロジェクトにおいては、必要経費を透明化する指定



オリンピック出場の鈴木亜由子選手が松尾総長を表敬訪問



教育基盤連携本部の看板掲式



大学院国際開発研究科創立25周年記念事業



HeForShe IMPACT 10x10x10「大学版ジェンダー平等報告書」発表

共同研究制度、また博士課程学生（PhD Candidates）をプロジェクトでフルタイム雇用すると同時に学位取得も可能にする制度、企業や海外研究機関とのクロスアポイントメント制度、などの試みを本格化させ軌道に乗せたいと考えています。また博士課程学生には、積極的にこのようなシステムに加わるとともに、学内でも学生が比較的自由に希望するプログラムに入れるような柔軟な構造に変えていく努力が必要であると思います。

最後に、これらの目標を達成するために必要な大学のマネジメント及びガバナンスのあり方について、指定国立大学制度も念頭に置き、課題を提起したいと思います。

第一は、財源の確保や配分、成果の管理も含めたマネジメント力の強化です。名古屋大学がミッションや目標の達成のために諸事業を計画的・継続的に進めていくためには運営費交付金以外の独自財源・外部資金の確保がどうしても必要です。努力したところにはインセンティブを付与するシステムも課題です。また、財源や人的資源の有効活用もきわめて重要な課題です。優秀な人材の確保、公正な部局及び教員評価、運営や成果管理など、大学全体のマネジメントと並んで、部局のマネジメントの工夫が生きるような仕組みに作り替える必要があります。大学及び部局ガバナンスの強化のための新しい仕組みも検討する必要があると思います。本部ではこれらの企画や支援を強化して財源を飛躍的に拡大し、運営費交付金の減少に対応するとともに、大学が必要とする事業に有効に投資して、名古屋大学を強化していきたいと思っています。

第二は、人事労務制度の改革です。名古屋大学では様々な職種があり、それぞれに承継・非承継、任期なし・任期付き、正規・非正規、など複雑な雇用状況です。構成員一人ひとりが誇りをもって働き、その意欲や能力をいかんなく発揮できるためには、シンプルでわかりやすい人事制度、役割と責任や権限が明確な人事制度、無駄のない組織が必要です。また公正な人事評価に基づくキャリアパスの

構築も未来の名古屋大学には必要でしょう。一人ひとりが名古屋大学の教職員であることを誇りに思い、最大限の能力を発揮でき、それが正当に評価され、キャリアパスに反映される制度を作ることは、重要な課題です。

第三は、生産性向上のための徹底した業務分析と合理化、そして組織改革です。私は今の名古屋大学の管理運営体制はまだまだ無駄が大変多く存在していると思っています。理想の形はどうあるべきか、ここから出発するとすれば、どの様な形があり得るのか、大学におけるこのような改革事例を他大学や海外にも学びながら、未来の名古屋大学を考える必要があります。事務組織を中心に管理運営システムの根本的な改革を進めたいと考えています。

第四に、今後の大学の管理運営にかかわる人材の育成・修練ということを考えています。大学のミッションや目標というのは短期で果たせるものではなく継続性と最適なマネジメントが必要です。そのために基本的な知識や組織の管理運営能力を備え訓練された人材を執行部や部局長にあてることが必須になります。このような人材を組織の戦略的に育成し、できれば全国の人材プールを作り、必要な人材を登用するようなことが可能になれば、より大学運営の透明化・効率化が図れると思います。

第五に、将来の日本の国立大学の姿を考えたとき、大学同士の連携、いや連携以上の機能統合が必須になるのではないかと考えています。今から緊密な大学間ネットワークを構築しておくことが極めて重要であると考え、具体的な連携事業を通じてまずは信頼関係の醸成を進めていきます。

以上、今後の名古屋大学の発展に向けて、そしてまた全構成員が誇りをもって教育、研究、支援、勉学に励むモチベーションを高く持てるような大学にするために、目標やミッションの共有をしながら前向きに進め、名古屋大学を昨年とは違った次元に高めていきたいと思っています。今年もよろしくお願いたします。

HeForShe セミナー「ダイバーシティと女性のリーダーシップの促進」を開催

HeForShe セミナー「ダイバーシティと女性のリーダーシップの促進」が、11月17日(木)、豊田講堂において、名古屋大学・博士課程教育リーディングプログラム「〈ウェルビーイング in アジア〉実現のための女性リーダー育成プログラム」・PwC ジャングループ共催により開催されました。政府機関、経済団体、メディア等13団体の後援を得て、国内初のHeForShe 公開イベントとなった本セミナーは、620名が参加し、大盛況となりました。

2015年、国連機関 UN Women は、ジェンダー平等を推進するためのグローバル運動 HeForShe のパイロット事業「IMPACT 10x10x10」において、HeForShe を主導する国家首脳10名、大学学長10名、企業 CEO 10名を IMPACT Champion として選出しました。本学は10大学に、PwC は10企業に選出されています。冒頭、松尾総長並びに鹿島 章 PwC ジャングループマネジメントパートナーによる主催者あいさつに続き、来賓あいさつとして、まず、国家首脳10名の一人に選出されている安倍晋三内閣総理大臣によるビデオメッセージ、続いてキャロライン・ケネディ駐日米国大使によるビデオメッセージが上映され、それぞれダイバーシティや女性の活躍推進の重要性及び本セミナーへの期待が述べられました。また、高橋雅之文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長、西岡達史外務省国際協力局地球規模課題総括課長、堀井奈津子愛知県副知事、福嶋香代子 UN Women 日本事務所長から、それぞれの立場から女性の活躍推進のための取り組みの紹介及びあいさつがありました。

続いて、総長と鹿島マネジメントパートナーがそれぞれの IMPACT Champion としてのコミットメントと将来ビジョンについて発表を行いました。本学は、①男女共同参画推進のためのセンター（拠点）の創設、②2020年までに



パネルディスカッションの様子



登壇者らによる記念撮影

女性リーダー（管理職）20%への増加をめざす、③男女共同参画推進のための産学官連携の推進、の3つのコミットメントを掲げています。

続くパネルディスカッションでは、「女性のリーダーシップ促進のためにできること」をテーマに、石塚元章 CBC テレビ論説室長による司会で、パネリストとして曾根智子カゴメ株式会社ダイバーシティ推進室長、横山幹也中部電力株式会社多様な人財活躍支援室長、我妻三佳日本アイ・ビー・エム株式会社理事、木内仁志 PwC あらた有限責任監査法人執行役副代表、エリザベス・ライオンズ米国国立科学財団東京事務所長、ステーブ・カノン香港大学副学長、広瀬恵子愛知県立大学入試・学生支援センター長（キャリア支援室長）、山中伸介大阪大学理事・副学長、東村副理事・男女共同参画室長が登壇し、企業、大学での取り組みや課題を討論しました。加えて、本学「〈ウェルビーイング in アジア〉実現のための女性リーダー育成プログラム」履修大学院生5名が学生パネリストとして登壇し、企業や大学への期待など堂々と意見を述べました。

さらに、一般社団法人日本経済団体連合会審議委員会副議長・女性の活躍推進委員長である吉田晴乃 BT ジャパン株式会社代表取締役社長が、「The Digital Possible～第四次産業革命時代における女性の活躍」と題する基調講演を行い、ご自身の経験を踏まえ、力強く、情報通信技術の発展が女性の活躍機会の拡大をもたらすと論じました。

最後に、岡田副理事並びに中嶋康博 PwC あらた有限責任監査法人名古屋事務所長が閉会あいさつを述べ、今後の HeForShe 活動予定を紹介しました。総司会は、本学監事である中谷聡子 PwC あらた有限責任監査法人パートナー並びに三枝麻由美男女共同参画室准教授が務めました。参加者からは、すばらしかった、勇気をもらった、など好意的な感想が寄せられ、女性の活躍推進に向けた産学官民連携の一層の進展につながる有意義な機会となりました。

名古屋大学レクチャー2016を開催

「名古屋大学レクチャー2016～持続可能な社会への道～」が、11月19日(土)、本学と中日新聞社の共催により、豊田講堂において開催されました。

本レクチャーは、本学が主催する最も重要な講演会の一つであり、様々な学問分野の卓越した研究者による講演を広く一般市民の皆様に公開して、今日の最高の「知」に触れていただくために行われるものです。講演者には、本学で最も荣誉ある「名古屋大学レクチャー」の称号が与えられ、表彰楯が授与されます。

第12回目となる今回の講演者は、2015年度の日本学士院賞を受賞された大阪市立大学及び滋賀大学の名誉教授である宮本憲一博士でした。宮本博士は、本学経済学部において、学士院会員でもある水田 洋本学名誉教授らの薫陶を受け、卒業後、財政学者として研究活動に入りました。しかし、高度経済成長の陰の部分でもある公害問題に直面し、経済学及び地方自治論の視点からこの問題に取り組み、環境経済学という新たな学問分野を開拓しました。そして、長い間、この研究部門をリードしてきました。

当日は、まず松尾総長からあいさつがあり、その後、宮本博士の長年の共同研究者であり、帝京大学教授及び一橋大学名誉教授である寺西俊一博士から、学士院賞受賞となった研究を中心に宮本博士の研究の意義についての解説講演が行われました。その中で寺西博士は、宮本経済学の体系は社会資本、都市、国家そして環境を理論の中に組み入れた「容器の経済学」にあり、環境保全型経済社会へのビジョンを提示された意義を強調しました。

その後の記念講演で宮本博士は、(ア)日本の深刻な諸公害は、地域住民の健康被害を無視してひたすら経済成長を追求する企業の起こした公害に対して、政府や学界が的確な原因究明と防止策を講じなかったために生じた政官



レクチャー授与の様子

財学の複合体によるシステム公害であること、(イ)それゆえに地域住民が住民運動と裁判闘争によって公害の克服に努めねばならなかったこと、(ウ)特にイタイイタイ病、新潟水俣病、四日市公害、熊本水俣病の四大公害裁判では、裁判所が発生源と被害者の因果関係を個別の病理学的究明でなく集団の疫学的究明によって判断したことが重要であったことを、それぞれ丁寧に解説しました。

宮本博士は、こうした貴重な経験を通じて日本は世界に多くの情報が発信できる環境先進国になったが、最近のアスベスト被害、原発事故、辺野古の海の埋め立て問題等、環境問題で後塵を拝するようになってきていることに警告を發して、講演を締めくくりました。

講演参加者は約500名で、「名古屋大学がこうした講演を開いたことに大きな共感を覚えた」、「知的な刺激を受けた」といった感想が寄せられました。



宮本博士の講演の様子



寺西博士の解説講演の様子

平成28年度秋季名古屋大学新入留学生歓迎懇談会を開催

平成28年度秋季名古屋大学新入留学生歓迎懇談会が、11月15日(火)、南部食堂において開催されました。この懇談会は、新入留学生の今後の留学生活が実のあるものになるよう激励し、留学生同士のみならず、留学生関係教職員との懇談を通して一層の相互理解・交流を深めることを目的として開催したもので、当日は新入留学生、教職員など約



総長と記念撮影をする留学生

350名の参加がありました。

最初に松尾総長から歓迎、激励のあいさつがあり、続いて渡辺理事の発声による乾杯により、懇談会の幕が上がりました。また、新入留学生を代表して、大学院理学研究科のラファエル・ハスレッカー（オーストリア）さんが、日本での留学についての抱負等を述べました。新入留学生が総長や教職員を囲んでにこやかに歓談したり、記念撮影したりする姿が会場のあちらこちらで見られました。懇談会は、町田国際教育交流センター長の閉会のあいさつの後、大盛況のうちに終了となりました。

東京エレクトロンと産学連携に関する協定を締結

本学と東京エレクトロン株式会社は、11月16日(水)、両者間の研究、情報交換、人材交流活動を相互連携して推進することを目的に協定を締結しました。東京エレクトロン株式会社は、東京都港区に本社を置き、半導体製造装置及びフラットパネルディスプレイ製造装置を製造・販売しており、この分野でのシェアは世界トップレベルです。本学



河合社長、総長らによる記念撮影

と東京エレクトロン株式会社は、これまで個別の共同研究などにより連携してきたところですが、それをより一層深め、さらなる連携強化を図るため、今回連携協定を締結することになりました。

調印式は本学において実施され、河合利樹東京エレクトロン株式会社社長ら5名が本学を訪問しました。調印式に先立ち、河合社長らは、これまで共同研究などで深く連携してきた天野 浩未来材料・システム研究所教授研究室と堀 勝未来社会創造機構教授研究室を見学しました。今回、河合社長らに大学の研究室を実際に見学して頂くことにより、産学連携の更なる深化の必要性を理解して頂きました。

研究室見学後、場所を総長応接室に移動して、松尾総長と河合社長らにより、今後の産学連携の方策などを話し合いました。その中で、河合社長は「本学との連携を通じて、今後とも、夢のある未来社会の実現に参画して参りたい」との言葉が述べられました。最後に、総長と河合社長が協定書にサインをし、今後の両者の連携を約束しました。

永年勤続者表彰式を開催

平成28年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月17日(木)、野依記念学術交流館において挙行されました。

被表彰者40名のうち31名が出席した表彰式では、松尾総長から一人ひとりに表彰状が手渡された後、被表彰者に対し、この20年間の職務の精励に対して労いの言葉があり、その日々の積み重ねにより、本学が発展できたと感謝の言



記念撮影の様子

葉がありました。

続いて、総長から、平成8年の採用当時の世相、出来事、総長自らの思い出の紹介があり、会場は懐かしい雰囲気になりました。

さらに、総長から、「NU MIRAI 2020を推進していくために、引き続き職務に精励して欲しい。これからの本学のさらなる発展を担うのは、ここにお集まりのみなさんであり、今後も教育、研究、社会貢献、医療を支え、ますます活躍して欲しい」とエールが送られました。

引き続き、被表彰者を代表して西尾医学部・医学系研究科人事労務課長より、この20年を振り返り、大学院の重点化、国立大学の法人化、附属病院の再整備、ノーベル賞受賞ラッシュ等の出来事の紹介があり、この日をまた新たな契機として、私たち一人ひとりが皆で力を合わせ、本学のさらなる発展に少しでも寄与できるよう、精励したいと決意のこもった謝辞が述べられ、終始お祝いムードに包まれた表彰式が行われました。

タイ王国チュラポーン王女殿下が本学を訪問

タイ王国チュラポーン王女殿下が、11月22日(火)、本学を訪問しました。チュラポーン王女殿下が所長を務めるチュラポーン研究所及び大学院大学と本学は、大学間学術交流協定を締結しており、王女殿下の本学来訪は、2007年及び2013年に続き3度目となります。

現在、タイでは、故プミポン国王の生誕90年を記念し



記念撮影

て、すでに設立されているチュラポーン病院 (Chulabhorn Hospital) の拡充とチュラポーン王女殿下医科大学 (HRH Chulabhorn Princess College of Medical Science) の設立準備が進められています。チュラポーン病院は、タイで高い死亡原因となっているがんに特化した病院であり、同医科大学の設立により、医療分野の教育・研究のさらなる充実と、その最新の知識・研究の治療への応用を目指しています。これらにより、がん治療のさらなる発展と、国内で十分な医療を受けることができない遠隔地の患者を救う新たな医療機関となることが期待されています。

今回の訪問は、同医科大学から、本学医学部へ学術交流の申し入れがあり、実現したものです。王女殿下との懇談では、渡辺理事、石黒医学部附属病院長のあいさつの後、医学系研究科の藤本副研究科長、大野副研究科長、小嶋保健学統括専攻長から医学部のカリキュラム、教育研究体制及び保健学科の教育について説明がありました。続いてチュラポーン王女殿下医科大学についての概要説明と質疑応答が行われました。

今回の訪問により、本学医学部との今後の交流が期待されます。

リーディング大学院プログラム合同シンポジウムを開催

リーディング大学院プログラム合同シンポジウムが、11月23日(水・祝)、ES総合館及び環境総合館において開催されました。本シンポジウムは、学内6つのリーディングプログラムを、将来的に共通教育カリキュラムへ統合することを見据え、プログラムを通じて得た経験や知識の共有にとどまらず、学生目線での「名古屋大学における大学院



グループワークにおいて熱心に議論する学生たちの様子

教育の将来像」を提言する機会として開催されたものです。

前島リーディング大学院推進機構長、杉山 直 PhD プロフェッショナル登龍門プログラムコーディネーターのあいさつ、名取はにわ元内閣府男女共同参画局長、武田一哉実世界データ循環学リーダー人材養成プログラムコーディネーターによる基調講演の後、参加学生らは大学院教育に関するいくつかのテーマに分かれグループワークを行い、終了後各グループの提言を全体へ発表しました。

前半の基調講演では、女性の社会進出や自動運転技術といった、プログラム学生にとって関心の高い内容が取り上げられ、質疑応答では講演者への質問が盛んに行われました。一方後半のグループワークでは、テーマごとに所属プログラムの枠を超えた熱い議論が繰り広げられました。専門分野や所属プログラムの異なる学生同士が、限られた時間で議論を収束し、ひとつの提言にまとめ上げる作業は容易ではなく、中には発表直前まで打ち合わせを行うグループもありましたが、無事発表を終えた学生の達成感に満ちた表情が印象的でした。当日はプログラムに関わる教員も多く出席し、学生からの提言に熱心に耳を傾けていました。

建物の解体に伴う防火・防災安全実験・訓練を実施

環境安全衛生管理室と施設管理部が協同して、11月1日(火)から11月28日(月)までの間、東山キャンパス内の解体を予定している建物を活用し、防火・防災のための各種実験を実施しました。実験は「実験室で使用される有機溶剤の燃焼実験」、「自動火災報知設備の機能の検証」、「火災発生時の煙発生状況と入口扉等の有効性の検証」、「粉末消火



消火器使用訓練の様子

器を使用した消火器訓練」等を行い、火災事故の発生原因の検証や防火・防災教育のためのビデオ教材の作成を行いました。本実験は学内の構成員にも公開し、多くの教職員、学生が見学に訪れました。実際の火災、煙の大きさや熱を体感でき、多くの参加者が防火に対する意識を新たにする機会となりました。

同建物は地域消防署にも開放し、消防隊による訓練を行う場として提供しました。名古屋市内の多地区の消防隊が訓練に参加し、はしご車の着梯訓練や防火扉、シャッター等の破壊訓練、排煙訓練、消火訓練等、様々な訓練を行いました。一部の訓練は本学と消防隊が連携して行い、互いの防火、防災の意識向上に役立てるものとなりました。消防署からは「訓練場などではない実際の大規模な建物でできるまたとない訓練の機会であり、特に若い隊員への技術伝承の場として、大変有意義な訓練場所を提供頂いた」との感謝の言葉を頂きました。

本学では、今後も防火・防災意識の向上を目指し、様々な訓練や企画を実施していきます。

環境安全衛生管理室創立40周年記念講演会を開催

環境安全衛生管理室創立40周年記念講演会が、12月1日(木)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。これは環境安全衛生管理室の前身である廃液焼却処理施設が1976年に設置されてから40年の節目を迎えたことを記念して開催されたものです。

村田環境安全衛生管理室長の開会あいさつ、松尾総長の



講演を行うユルゲン・ステック環境保護部長

あいさつの後、赤石 勝文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官補佐から来賓祝辞が述べられました。講演会は、環境安全衛生に関する先進的かつ精力的な取り組みを行っている海外の2つの大学から、講師を招き行いました。環境先進都市として有名なドイツのフライブルク大学のユルゲン・ステック環境保護部長から、環境に配慮した研究環境の構築の重要性について講演が行われ、特に実験系有害廃棄物の回収・運搬・保管の安全性の確保と、環境に配慮した処理、なおかつコストダウンも実現した話は大変興味深いものでした。続いて世界大学ランキングでアジア1位であるシンガポール国立大学のベック・ティアン・グアン環境安全衛生管理室長から、安全な組織づくりのために重要な技術的改善、システム構築、そして安全文化の醸成の3ステップと、シンガポール国立大学での実際の組織体制と活動について講演が行われました。最後に、村田室長から、本学の環境安全衛生の40年を振り返るとともに今後進むべき道について講演が行われました。講演会には116名の参加があり、各講演後の質疑応答では活発な議論が行われました。これからも国際的な水準の環境安全衛生を保つことを目指して活動を推進していきます。

ベンチャーズトーク～名古屋大学発ベンチャー企業の集い～を開催

名古屋大学発ベンチャー企業、金融機関関係者、学術研究・産学官連携推進本部関係者などが一堂に会し、相互理解を深めることを目的とした「ベンチャーズトーク～名古屋大学発ベンチャー企業の集い～」が、12月2日(金)、NIC 3階大会議室において開催されました。本学では平成28年7月に名古屋大学発ベンチャー企業への称号授与制



開会あいさつをする財満副総長

度を制定し、平成28年9月に申請のあった15のベンチャー企業に対して名古屋大学発ベンチャー称号の授与を行い、ベンチャー支援に力を注いでいるところです。本イベントはその一環として開催されたもので100名以上の参加者で会場は満員でした。

前半は、株式会社日本政策金融公庫、日本ベンチャーキャピタル株式会社からベンチャー企業の資金調達やベンチャー企業への期待について、愛知県雇用労働相談センターから雇用ルールについて、本学から名古屋大学発ベンチャー企業への期待をテーマとしてそれぞれの講演が行われました。後半は、名古屋大学発ベンチャー企業15社の会社紹介、本学、金融機関への期待、要望について、ベンチャー企業の代表者などにより発表が行われました。その中には、ベンチャー企業間や金融機関とベンチャー企業間の情報交換の場の提供、長期的な視野に立った大学にしかできない土壌作りを望む声などがあげられました。

講演会の後に行われた懇親会でも活発な意見交換が行われ、大いに賑わいを見せていました。全体を通して本学、名古屋大学発ベンチャー企業の一層の躍進に繋がる有意義な機会となりました。

中国語スピーチコンテスト南京大学杯を開催

中国語スピーチコンテスト南京大学杯が、12月4日(日)、文系総合館カンファレンスホールにおいて開催されました。中・上級コースの部には4名、初級コースの部には21名の学生が参加しました。南京大学海外教育学院から教員4名、江蘇省にある江蘇国際文化交流センターから2名が来学し、スピーチコンテストに出席しました。会場に



あいさつをする中東総長補佐

は、教養教育院中国語科の教員、参加学生を指導した中国人留学生などが大勢参加し、コンテストを見守りました。

中・上級コースの部では、7分間の自作のスピーチと1分間の質疑応答で競い合いました。どの学生も堂々としたスピーチを行い、時にはユニークな内容で会場を沸かせていました。初級コースの部は、事前に選択した課題文を暗唱し、スピーチを行いました。

南京大学、本学あわせて4名の審査員による採点により、一等賞4名、二等賞12名が選ばれ、受賞者には、江蘇省への旅行や南京大学への短期留学などの副賞が贈られました。また全員に南京大学のTシャツが贈られました。

南京大学の程愛民教授からは、多くの意欲的な学生が本コンテストに参加したことへの賞賛、中国語能力向上のための学習方法のヒント、将来、是非江蘇省、南京大学を訪れ更なる中国への関心を高めて欲しい旨の講評がありました。参加した学生のなかには、学習歴半年の1年生もおり、中国語への関心や学習意欲が感じられました。本コンテストは今回で4回目となりますが、中国語学習をとおした学生、教員間の交流の機会となっており、今後も継続して開催する予定です。

HeForShe グローバル・アイデアソンを開催

HeForShe グローバル・アイデアソンが、12月6日(火)、理学南館1F セミナールームにおいて開催されました。

UN Women による HeForShe を推進する世界の10大学は、共通コミットメントとして「安全なキャンパスの構築」を掲げています。「女性に対する暴力撤廃の国際デー(11月25日)」に合わせて、HeForShe 推進の世界の大学か



性暴力撲滅のための解決策の提示

ら本学を含めた8大学が参加し、キャンパスから性暴力を撲滅するためのアイデアソンを、各大学においてそれぞれ開催しました。アイデアソンとは、アイデアとマラソンを組み合わせた造語で、問題解決のためのアイデアを生み出すために行われるイベントのことです。参加した8大学は、アイデアソンの開催の様子や解決策を、twitterの#GlobalIdeathonを通じてグローバルに発信しています。

本イベントは学生主体で行われ、大学院国際開発研究科大学院生のデレス・マカロムさん、ジェニファー・スチュワートさん、エリザベス・モニズさん及びG30学部のクムダラー・アウンさんが企画運営を担当しました。この4名以外に、当日は20名の学生が参加しました。学生は小グループに分かれてキャンパスでの性暴力撲滅のために何ができるかについて議論を行った後、それぞれのグループでの解決策を発表し合い、どの解決策を採用するか議論を行いました。白熱した議論を経て、それぞれの解決策をまとめて採用することで意見がまとまりました。参加学生による解決策の提示ビデオは、本学 HeForShe twitter に掲載しています。

全学技術センター技術職員が大連理工大学を訪問

全学技術センター長である竹下理事・事務局長及び本学の一行は、12月5日(月)から12月7日(水)までの3日間、中国の大連理工大学を訪問しました。訪問中、郭 東明大連理工大学長表敬訪問、座談会、専門交流会や施設見学を行いました。

座談会は、梁 延徳大連理工大学工程訓練センター長



座談会、専門交流会の様子

のあいさつ、竹下理事のあいさつで始まり、全学技術センターからは古賀和司主席技師、長谷川達郎副技師、高濱謙太郎技術員の3名がそれぞれの業務内容についてプレゼンテーションを行いました。大連理工大学からは、張 紅哲工程訓練センター准教授、孟 長功基礎化学実験教学センター教授、張 華化学分析テストセンター主任、王 開電工電子実験教学センター宇宙常務副主任の4名が業務内容と所属施設の説明を行い、全学技術センターに興味を持つ技術職員、技術スタッフや学生が多数参加しました。専門交流会では全学技術センターの3名を囲んで活発な意見交換が行われました。施設見学では、8実験施設を視察し、施設の装置、設備、システムの維持・安全管理などについて、より専門的な意見交換を行いました。

今回の訪問団には荒木研究支援課長、鎌澤事業推進課長も同行し、6月に締結された学術交流協定後、最初の本格的な交流で、全学技術センターとしての参加も初めてです。今回の訪問を機にこれまで以上に活発にそれぞれの専門分野での協力関係を深めていくことで意見の一致をみましたが、今後、両大学の技術職員や技術スタッフのさらなる交流が期待されます。

全学同窓会第3回講演会を開催

名古屋大学全学同窓会第3回講演会が、12月9日(金)、理学南館坂田・平田ホールにおいて開催されました。この講演会は、本学の後援を受け、全学同窓会と一般社団法人学士会が主催し、学生、教職員、名誉教授、一般市民など約180名の参加がありました。講師に前総長である濱口道成国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 理事



講演会場の様子

長を迎え、「科学技術の課題と展望」と題して講演が行われました。和田壽弘新全学同窓会代表幹事の司会のもとに講師紹介があり、続いて渡辺幸重学士会事務局長よりあいさつが述べられました。濱口理事長の講演では、理科系における研究論文の被引用回数上位10を国別に整理して日本と先進国とを比較し、日本の現状の問題点を明確に指摘しました。これを克服するためには、国際共同研究ができる環境を、研究費のみならず人材育成を含めて整備することが急務であることを力説されました。

講演会終了後にグリーンサロン東山において夕食会が開催され、本学役員等を含め39名が参加しました。最初に柴田昌治副会長と松尾総長からあいさつがあり、続いて佐々木毅学士会理事長の乾杯の発声により会は始まりました。終了近く、岡田邦彦副会長と木村理事の機知に富んだあいさつがあり、和やかな雰囲気の中で、伊藤義人副会長の締めあいさつがありました。夕食会は、意見交換及び親睦を深める場として大いに意義のあるものとなりました。

細菌の付着を操る

堀 克敏 大学院工学研究科教授

中谷 肇 大学院工学研究科講師

私たちの周りの環境にはさまざまな種類の微生物が生息しており、そのほとんどは様々な物体に付着していると考えられています。人工物に付着した微生物は私たち人間にとっては厄介なものとなる事が多く、医療器具に付着した場合は体力が弱った患者に細菌が感染する原因となるほか、食品の調理加工器具に付着した場合は汚染を引き起こし、食中毒の原因となるなど、私たちの健康を

脅かします。一方で環境分野においては、微生物の付着が有害物質や汚物の分解を行う微生物集団の形成に重要で、主に生物濾過と呼ばれる工程で下水処理場や河川の水質改善に役立っています。また、浄化プロセスのほかに、人工担体に付着させた細菌を触媒のように使って有用な化学物質を生産させる反応プロセスについても研究が行われています。したがって微生物の付着メカニズムを

解明し、その形成を制御することができれば、微生物汚染を防止する技術はもとより、付着微生物を利用した様々な化学反応プロセスの開発にもつながると考えられます。

排ガスリアクターの中から分離された細菌の一種、アシネトバクター属細菌 Tol 5 株は、私たちの研究によって、プラスチックやガラス、ステンレスに至る様々な人工材料の表面に強く付着するという特徴的な性質を持つ細菌であることがわかりました(図1)。さらにこのような性質は AtaA と名づけた細胞表面のタンパク質分子によることがわかりました。

AtaA タンパク質の構造は、3本の直鎖状ペプチド鎖が絡み合いながら

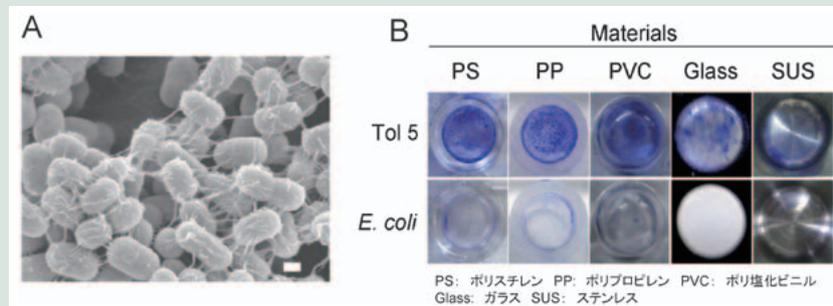


図1 高付着性細菌アシネトバクター属 Tol 5株
A : Tol 5株の電子顕微鏡像、 B : Tol 5株をさまざまな材質の表面に付着させた後、付着した細菌を青紫色の色素で染色した。大腸菌 (*E. coli*) と比較して様々な材質の表面に付着することがわかる。(図は石川ら *J. Biosci. Bioeng.* 2012 より抜粋)

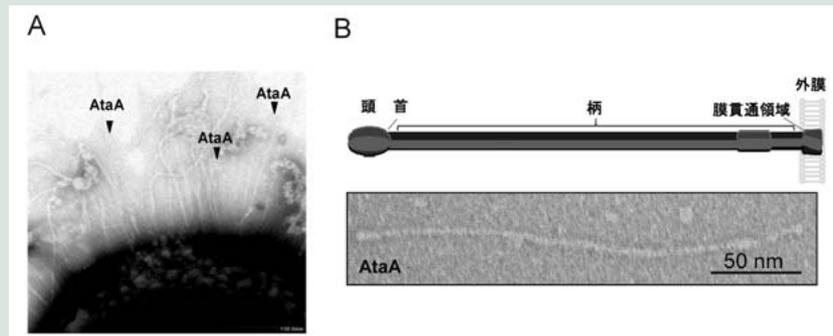


図2 アシネトバクター属 Tol 5株の AtaA タンパク質
A : Tol 5株の細胞表面に生える AtaA タンパク質の電子顕微鏡像、B : 一本の AtaA タンパク質分子を取り出し、電子顕微鏡で観察した像。AtaA タンパク質の微細構造が見て取れる。(図は吉本ら *Scientific Reports* 2016 より抜粋)

巨大な3次元構造を形成しており、細胞表面に250 nmほどの比較的まっすぐなファイバー構造を作っています。ファイバーは先端側から「頭-首-柄-膜貫通領域」という小さな構造単位に分けられます(図2)。ファイバー先端がアミノ末端、細菌細胞の外膜にアンカーリングしている側がカルボキシ末端となります。さらに柄は、無数の複雑な構造をしたドメインがモザイク状に反復し、それらをコイルドコイルと呼ばれる超らせん構造が連結しています。

上記のような基礎的な研究と並行して私たちはAtaAタンパク質の人工材料への付着を利用するための研究も行ってきました。微生物中の酵素を化学反応の触媒として利用する際に、その微生物をあらかじめ何らかの人工材料でできた担体に付着させることで、生産物と微生物の分離を容易にしたり、微生物触媒の再利用が可能になるといった利点があります。このような観点から、私たちはAtaAタンパク質を様々な細菌に生産させることで、それらの細菌に付着性を獲得させ、人工担体に付着させられるか検討を行いました。その結果、いくつかの細菌でAtaAタンパク質が生産され、付着性を獲得させることに成功しました(図3A)。また、付着性を獲得した細菌を人工材料であるポリウレタンに付着させ、この細菌が付着したポリウレタンを触媒とした物質生産プロセスの構築にも成功しました(図3B)。現在の課題は、かなり巨大なAtaAタンパク質の全体を細胞表面に生産できる細菌が限られていることです。付着に必要な構造が明らかになれば、必要な部分だけを残した改変AtaAタンパク質を作り出すことが可能になりますので、付着部位の特定を急いでいます。しかし、巨大で複雑な4次構造を形成する

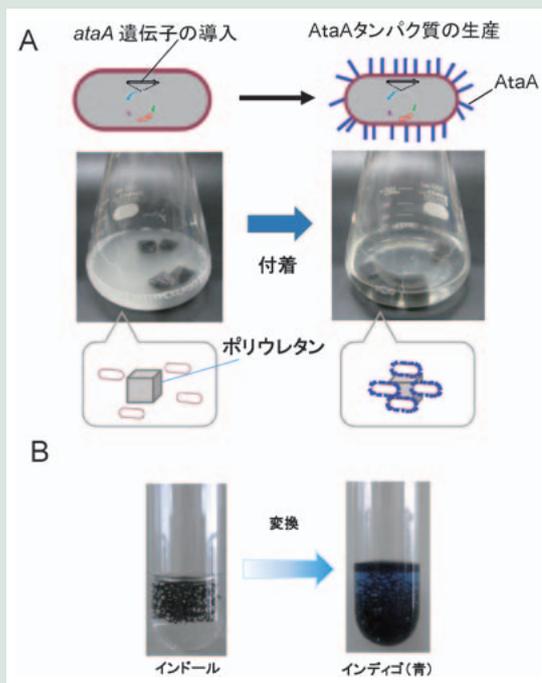


図3 AtaAタンパク質による細菌の固定化と固定化細菌による物質変換

A: ataA遺伝子を細菌に組み込み、発現させるとAtaAタンパク質が細菌の表面に生産され、ポリウレタンなどの担体に付着するようになる。

B: 細菌の付着したポリウレタンを使い、インドールからインディゴを生産する反応を行った。

(図は中谷、堀 *Front. Chem. Sci. Eng.* 2016 および 石川ら *Biotechnol. Bioeng.* 2013 より抜粋)

AtaAの一部を欠損させること自体、容易ではありません。欠損により、残した部分の高次構造そのものが破壊されてしまう可能性が大きいからです。そうならないように、構造情報に基づく緻密な設計が求められています。我々は、今、この難しい課題に挑戦しています。

名古屋大学大学院工学研究科化学・生物工学専攻生物機能工学分野 教授。

1994年 住友化学工業(株) 研究員、1995年 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了 博士(工学)、1995年 グリーンブル株式会社企画開発室室長、1998年 東京工業大学生命理工学部助手、2004年 名古屋工業大学大学院工学研究科准教授、2005年 JST さきかけ研究員(兼任)、2011年より現職。

ほり かつとし



大山 順也
大学院工学研究科助教

ナノメートルのスケールで大きく変わる触媒の性能

名古屋城天守の金鯨は雨風にさらされても錆びることなく輝きを失いません。これは金が化学的に非常に安定だからです。言い換えれば金の反応性は非常に低いということになります。そのため金は化学反応の触媒として機能しないと考えられてきました。実際に私たちの身の回りには金触媒として働きません。例えば、お祝いなどの際に金箔入りのお酒が出ることがありますが、金箔が触媒となってお酒が酸化する速度が上がるなんてことはありません。ところが金をナノ粒子にすると驚くべき触媒性能を発揮します。例えば、空気浄化のために一酸化炭素の酸化反応が求められますが、金ナノ粒子はこの反応に非常に高い触媒性能を示し0℃以下という低温でも反応が進行するようになります。金ナノ粒子はアルコールの酸化反応にも触媒活性を示しますので（誰もやらないとは思いますが）お酒に金ナノ粒子を入れることはお勧めしません。

このように金の触媒性能はその大きさに強く依存します。具体的にいうと、10ナノメートルを下回ると触媒性能が現れだし3ナノメートル以下になると劇的に性能が向上します。では、金は小さくするほど高い触媒性能を示すのでしょうか？我々の研究グループでは金の粒子の大きさが触媒性能に与える効果を詳しく調べました。研究対象の金触媒は固体触媒と呼ばれるもので、金の粒子を金属酸化物の上に乗せたような形になっています。下図 (a) に原子1つをも可視化する最先

端の電子顕微鏡を用いて観察した金触媒の写真を示します。下地の雲のようにモヤモヤ見えるのはアルミニウムの酸化物（アルミナ）で白く光っているところが金です。黄色矢印で示した白い粒は孤立した金原子です。数個の金原子が集まったもの、さらに多数の金原子が集まったものも見られます。つまりアルミナ上の金粒子の大きさには分布があります。そこで多数のサンプリングと統計的解析によって金粒子の大きさが触媒性能に与える効果を調べました。金触媒を用いたアルデヒドの水素化反応の結果を紹介すると、金原子1つで孤立したものは触媒として働かず、5-30個程度の金原子が集まり粒子の大きさが0.6-1.2ナノメートルになったときに最も高い性能が現れることが示唆されました（図 (b)）。この結果は高活性な触媒の設計指針となります。実際、下地のアルミナを修飾することで、5-30個程度の金原子の集まりを高い割合で生成させることに成功し、従来の金触媒よりも大きく性能を高めることができました。最近では粒子のサイズに加えて結晶構造の制御とその効果についての研究を展開しています（図 (c)）。

今回は金触媒についての研究を紹介しましたが、我々は他にも様々な金属を触媒に用いています。金属ナノ粒子の構造によって変化する特性を理解し、そしてコントロールすることで、資源・環境・エネルギー問題の解決に貢献する高性能な触媒を開発していきたいと考えています。

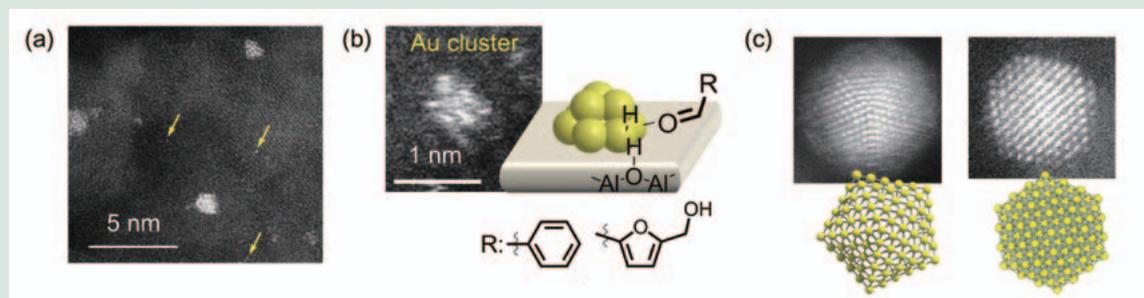


図 (a) アルミナに担持した金ナノ粒子の電子顕微鏡像。(b) アルデヒドの水素化反応に有効な小さな金クラスター。(c) 結晶構造の異なる金ナノ粒子。

岐阜薬科大学との基本協定書調印式を挙

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、12月9日(金)、医学部鶴友会館大会議室において、岐阜薬科大学との連携・協力の推進に関する基本協定書調印式を挙

両機関は特に、疾患の早期発見や安全で有効な個別化治療へと移行しつつある現在の医療における社会的ニーズに
 応えるため、最先端の創薬研究が必要であると考えています。



調印後握手を交わす高橋研究科長(左)と稲垣岐阜薬科大学長(右)

本協定により、共同研究の推進、研究者及び関連職員の交流、研究資源の相互利用を推進し、主に創薬に主眼を置いた研究を中心として両機関の連携を強化し、最先端の研究分野でのさらなる飛躍を目指します。

調印式には、高橋医学系研究科長、門松同研究科副研究科長、若林同研究科副研究科長、横井 毅同研究科教授及び吉田医学部・同研究科事務部長、岐阜薬科大学から、稲垣隆司岐阜薬科大学長、原 英彰同大副学長及び川部昌洋同大事務局長が出席し、高橋研究科長及び稲垣学長により協定書へ署名されました。

高橋研究科長から、本協定により共同研究を一層推進し、この地区の創薬研究に貢献していきたい旨、稲垣学長から、本学の研究力と岐阜薬科大学の創薬全般への対応力等を活用し、創薬研究のスピードを上げ、研究競争力を付けたいとのあいさつがありました。

名古屋大学-ラクオリア創薬株式会社との合同シンポジウムを開催

●大学院医学系研究科、大学院創薬科学研究科、環境医学研究所、予防早期医療創成センター

大学院医学系研究科、大学院創薬科学研究科、環境医学研究所及び予防早期医療創成センターは、12月8日(木)、医学部鶴友会館大会議室において、ラクオリア創薬株式会社との合同シンポジウムを開催しました。

大学院医学系研究科、大学院創薬科学研究科及び環境医学研究所は、それぞれラクオリア創薬との産学協同研究講

座を設置しており、本学における創薬を核とした産学連携の推進を目的として、同シンポジウムを定期的で開催しています。第3回目となる今回は、創薬を中心とした双方の研究・開発の現状についてプログラムが組まれました。

シンポジウムでは、まずラクオリア創薬の渡邊修造取締役常務執行役員から本学における創薬研究の紹介がありました。続いて、丸山彰一医学系研究科教授、大嶋篤典創薬科学研究科准教授、山中章弘環境医学研究所教授及び本多裕之工学研究科・予防早期医療創成センター教授から、各々の領域における学術講演が行われました。また、医薬品業界から、舂屋圭一ペプチドリーム株式会社取締役による創薬研究開発の講演が行われました。

当日は、本学及びラクオリア創薬株式会社から総勢83名の参加者があり、この分野に対する期待の高さが現れていました。



シンポジウム会場の様子

平成28年度名古屋大学鶴舞公開講座を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科では、11月19日(土)、中央診療棟3階講堂において、平成28年度名古屋大学鶴舞公開講座を開催しました。同講座は、市民向け公開講座として社会的に関心が高く、日常で役立つ話題をテーマに、平成17年度から年1回開催しているものです。

同講座は、平成18年において「ここまで来ていたがん治



会場の様子

療」をテーマに講演が行われており、ちょうど10年目にあたる今回、改めて“がん”を取り巻く状況を紹介するよい機会であったことから、「“がん”最新スタンダード ～予防・治療・暮らしの観点から～」と題し行われました。今回の講座では、内藤真理子同研究科社会生命科学講座予防医学准教授による「がんを防ぐ、がんを早くみつける」、満間綾子同研究科がん薬物療法学特任講師による「知って納得、がん治療」、そして、黒柳佳代医学部附属病院地域連携・患者相談センターがん相談員による「がん相談と暮らしのサポート」の3つの講演が行われました。

いずれの講演でも、講師の方々が時折ユーモアを交えてわかりやすく紹介し、和やかな雰囲気の中、受講者は熱心に耳を傾けていました。

当日は、リピーターを数多く含む20代から80代の幅広い年齢層約140名が受講し、受講者からは、大変参考になった、来年以降もぜひ参加したいという声が多数聞かれました。

中国人民大学外国語学院との部局間学術交流協定を締結

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、11月3日(木・祝)、中国人民大学外国語学院との部局間学術交流協定を締結しました。

中国人民大学は、中国における人文・社会系の研究で最高位に位置するとされる大変評価の高い大学です。人文学部



署名後の様子

があり、そのうち日本文学社会科学センターでは、日本の言語・文化・社会に関する高度な研究が行われています。

同研究科日本語文化専攻もまた、日本語教育研究機関としてこの研究分野を牽引してきたことから、同大学とはこれまで、プロジェクトやフォーラム、講演会等、多様な交流実績を多く積んできました。

改めて学術交流協定を締結することで、学術交流がさらに活発になることが期待されるとともに、相互に教員が客員研究員として教育研究方法を学んだり、研究に必要な資料を提供し合ったりすることができるようになります。

また、学術交流協定に基づく学生交換に関する覚書も交わしました。これにより、優秀な留学生を呼び寄せたり、同研究科の学生を送り出して、中国の研究者や学生の国際的な視点から研究の視野を広げさせたりすることが可能になります。

同研究科は、平成29年4月に新たに設置される大学院人文学研究科に再編されます。大学院人文学研究科としても、本協定と同内容で協定を締結し覚書を交わすことを確認しています。新研究科でも活発な教育・研究の交流の促進を行い、本学の国際化に貢献していきます。

第18回「まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科建築学教室は、11月19日(土)、ES総合館ESホールにおいて、第18回まちとすまいの集い「しなやかな人・建築・都市」を開催しました。

現在の地球環境や社会が抱える諸問題において、問題解決に向けて直接的な対応をとる方法に加えて、持続可能な社会に向けた「しなやか」な方法論が注目されています。



討論の様子

このような視点から、建築学の各分野で関連する話題の講演が行われました。

まず清水裕之環境学研究科教授は、「持続可能な緑と景観の管理」と題して、緑地の適切な管理に必要な作業量を評価する新たな概念を導入し、国土の緑と景観の多様な特性と持続可能性に関する研究成果を紹介しました。続いて、久野 覚同研究科教授は、「しなやかに暮らす」と題して、寒暖に対する人の感じ方のメカニズムを踏まえ、建物の断熱・通風性能の向上と空間の柔軟な使い方による快適で省エネルギーな生活の実現を提案しました。最後に長江拓也減災連携研究センター准教授は、「建築技術としなやかな回復」と題して、建物に働く大地震の力をしなやかに受け止める建物のアイデアを示し、大規模実験により開発を進めていることを述べました。

最後に、会場からの質問も交えて討論が行われ、人口減少や地球温暖化、大規模災害などのリスクが増す中で、しなやかさを持つ人・建築・都市のあり方について意見が出されました。学生、建築関係者、一般市民など学内外から約60名の参加があり、盛況のうちに終了しました。

第66回名古屋大学博物館コンサート (NUMCo) を開催

●博物館

博物館は、12月10日(土)、同館展示室において第66回NUMCo「フルーツ・トリオが贈るクリスマスコンサート」を開催しました。今回は、辺見亜矢氏、日置智美氏、朝倉ゆき氏によるフルーツ三重奏です。

まず、はじめに門脇誠二講師から、企画展「誇張なきアート」のお知らせと、「人類はすでに4万年前にトリの骨で



コンサートの様子

作った笛を使っていたので、そのころから音楽や絵などの芸術を楽しんでいたようだ」と博物館らしい解説がありました。

クリスマスカラーで登場したフルーツ・トリオの演奏は、カステレード作曲の「フルーツ吹きの休日より 第4楽章《軽快な笛吹き》」から始まり、その透きとおる音色に観客は引き込まれた様子でした。「くるみ割り人形メドレー」や「クリスマス・キャロルメドレー」では、ウキウキするようなクリスマス気分にあたり、また、アルビージの「小組曲2番より《泉》」では、フルートを吹いている3人の前にまるで泉があるように感じられる演奏でした。約1時間の演奏は、255名の鳴り止まぬ拍手の内に終わりました。

次回の博物館コンサートは、2月11日(土)ソネット(ミュージックベル)、3月25日(土)ティエラブランカ(フォルクローレ)です。

勲章関係等

受章日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28.11. 4	文化功労者	元遺伝子実験施設助教授	篠崎 一雄	
H28.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	千田 純一	
H28.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	山口 勝美	

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28. 4. 6	Best Paper Award, The 4th International Conference on Engineering & ICT 2016	大学院情報科学研究科教授	大岡 昌博	
H28. 5.16	日本作物学会 第241回講演会優秀発表賞 (口頭発表部門)	大学院生命農学研究科助教	大井 崇生	
H28. 6. 1	日本計算工学会 第21回 (平成28年度) 計算工学講演会 グラフィクスアワード特別賞 (Meshman 賞)	大学院工学研究科准教授	山本 佳士	伊佐治優 (大学院工学研究科 M2)、中村 光 (大学院工学研究科教授)、三浦泰人 (大学院工学研究科助教) と連名
H28. 6.24	第16回 AOB 研究会 奨励賞	大学院医学系研究科研究員	王 越	
H28. 8. 1	応用物理学会 論文奨励賞	大学院工学研究科助教	高橋 勲	
H28. 8. 6	Best Paper Award, IEEE EmergiTech 2016	未来社会創造機構特任教授	青木 宏文	他 9 名と連名
H28. 8.26	第28回高遠・分子細胞生物学シンポジウム 優秀賞	大学院理学研究科特任助教	野田口理孝	丹羽優喜 (大学院理学研究科研究員) と連名
H28. 8.31	Excellent Paper Award, IWIN (International Workshop on Informatics) 2016	大学院情報科学研究科助教	榎堀 優	
H28. 9. 8	日本ソフトウェア科学会 第32回大会高橋奨励賞	大学院情報科学研究科准教授	中澤 巧爾	
H28. 9. 8	日本ソフトウェア科学会 第4回ソフトウェア論文賞	大学院情報科学研究科准教授	本田 晋也	高田広章 (大学院情報科学研究科教授)、他 2 名と連名
H28. 9. 9	Best Poster Award, The Royal Society of Chemistry-Tokyo International Conference 2016, Advanced Analytical Science and Technology	大学院医学系研究科助教	林 由美	財津 桂 (大学院医学系研究科准教授)、他 6 名と連名
H28. 9.10	日本カナダ学会 研究奨励賞	高等研究院特任助教	梅川 佳子	
H28. 9.13	Young Geographer Prize, The 2nd Asian Conference on Geography, The 11th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography	大学院環境学研究科 日本学術振興会 外国人招へい研究員	バンブラグチ ナンディンツェツェグ	篠田雅人 (大学院環境学研究科教授)、他 2 名と連名
H28. 9.15	BCSJ Award Article, Bulletin of the Chemical Society of Japan	大学院情報科学研究科研究員	カラカッドバランビル サンカン サンティア	古賀伸明 (大学院情報科学研究科教授)、長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H28. 9.15	第5回 D-アミノ酸学会奨励賞	大学院生命農学研究科講師	伊藤 智和	
H28. 9.16	平成28年度水文・水資源学会 学術出版賞	宇宙地球環境研究所教授	檜山 哲哉	
H28. 9.16	日本植物学会 2016年度 JPR 論文賞	名誉教授	町田 泰則	他 8 名と連名
H28. 9.17	第91回日本脳神経外科学会 中部支部学術集会 優秀論文賞	医学部附属病院医員	秋 禎樹	
H28. 9.18	日本第四紀学会 功労賞	博物館教授	大路 樹生	門脇誠二 (博物館講師) と連名
H28. 9.20	平成28年度日本医師会 医学研究奨励賞	医学部附属病院助教	神田 光郎	
H28. 9.21	Soil Science and Plant Nutrition Award	大学院生命農学研究科教授	浅川 晋	
H28. 9.21	第64回日本金属学会 論文賞	大学院工学研究科特任教授	鬼柳 善明	塩田佳徳 (大学院工学研究科研究員)、他 5 名と連名
H28. 9.21	第61回 (2016年度) 日本土壌肥料学会賞	大学院生命農学研究科教授	渡邊 彰	
H28. 9.21	日本土壌肥料学会 2016年度佐賀大会ポスター賞	高等研究院特任助教	蜂谷 卓士	榊原 均 (大学院生命農学研究科教授)、他 5 名と連名
H28. 9.22	2016年度計測自動制御学会 学会賞 (論文賞)	未来社会創造機構教授	新井 史人	他 4 名と連名
H28. 9.23	第二回松野環境科学賞 (論文賞)	大学院生命農学研究科特任助教	後藤 寛貴	
H28. 9.24	平成27年度日本鉱物科学会 JMPS 学生論文賞	宇宙地球環境研究所 日本学術振興会特別研究員 (PD)	田口 知樹	
H28. 9.28	第6回フロンティアサロン 永瀬賞 最優秀賞	トランスフォーマティブ 生命分子研究所教授	伊丹健一郎	
H28. 9.29	Young Investigator Award BRONZE, Hypertension Seoul 2016 (The 26th Scientific Meeting of the International Society of Hypertension)	大学院医学系研究科助教	内仲 彩子	
H28. 9.29	2016年日本胸部外科学会 優秀論文賞	医学部附属病院病院講師	阿部 知伸	碓水章彦 (大学院医学系研究科教授)、大島英揮 (大学院医学系研究科准教授)、成田裕司 (医学部附属病院講師)、他 6 名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28. 9.29	Fellow of the Royal Society of Chemistry (FRSC)	大学院理学研究科教授	篠原 久典	
H28. 9.29	The Best Poster Award, ICMAP	大学院工学研究科助教	鈴木 陽香	豊田浩孝（大学院工学研究科教授）と連名
H28. 9.30	日本学術振興会 平成28年度科学研究費助成事業 審査委員表彰	大学院創薬科学研究科教授	人見 清隆	
H28. 9.30	日本学術振興会 平成28年度科学研究費助成事業 審査委員表彰	大学院理学研究科准教授	戸部 和弘	
H28.10. 1	第64回日本臨床視覚電気生理学会 優秀発表賞	医学部附属病院医員	小南 太郎	
H28.10. 6	Best Oral Presentation Award, Challenges in Advanced Analytical Tools and Techniques for Batteries: in Honor of Prof. Zempachi Ogumi	大学院工学研究科講師	本山 宗主	
H28.10.10	中村元東方学術賞	大学院文学研究科教授	和田 壽弘	
H28.10.11	日本作物学会 第12回優秀発表賞（第242回講演会ポスター発表部門）	大学院生命農学研究科助教	大井 崇生	
H28.10.11	機器研究会 平成28年度流体科学研究賞	大学院工学研究科教授	佐宗 章弘	
H28.10.14	日本材料学会 第16回コンクリート構造物の補修, 補強, アップグレードシンポジウム 優秀論文賞	大学院工学研究科助教	三浦 泰人	
H28.10.15	2016年度日本キャリア教育学会 学会賞	名誉教授	寺田 盛紀	
H28.10.16	第230回日本内科学会東海地方会 優秀演題賞	医学部附属病院医員	加藤 拓樹	井口光孝（大学院医学系研究科特任助教）、森岡 悠（医学部附属病院医員）、八木哲也（大学院医学系研究科教授）、他2名と連名
H28.10.18	第12回日中有機半導体会議 ポスター賞	物質科学国際研究センター 研究員	ウ ヤン	
H28.10.21	第39回鯨光会顕彰	大学院医学系研究科教授	青山 温子	
H28.10.21	Young Investigator Award, The 8th International Forum of Rheumatoid Arthritis	医学部附属病院医員	渡部 達生	
H28.10.22	日本機械学会 2016（平成28）年度生産加工・工作機械部門 優秀講演論文表彰	大学院工学研究科教授	社本 英二	
H28.10.22	日本機械学会 2016（平成28）年度生産加工・工作機械部門 優秀講演論文表彰	大学院工学研究科准教授	鈴木 教和	
H28.10.23	日本災害情報学会 阿部賞	減災連携研究センター寄附研究部門助教	倉田 和己	新井伸夫（減災連携研究センター特任教授）、福和伸夫（減災連携研究センター教授）と連名
H28.10.30	Network Lectureship Award, Asian Core Program/Advanced Research (China ICCEOCA-11)	大学院創薬科学研究科助教	下川 淳	
H28.10.30	Network Lectureship Award, Asian Core Program/Advanced Research (Malaysia ICCEOCA-11)	大学院創薬科学研究科助教	下川 淳	
H28.10.30	Lectureship Award, Asian Core Program/Advanced Research Network	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H28.10.31	The 18th Holger Erdtman Lectureship Award	トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	伊丹健一郎	
H28.11. 9	毎日新聞社・アジア調査会 第28回アジア・太平洋賞特別賞	大学院環境学研究科准教授	上村 泰裕	
H28.11.10	Outstanding Poster Presentation Award, Asian ICMC	大学院工学研究科助教	土屋 雄司	
H28.11.11	日本分析化学会電気泳動分析研究懇談会 寺部茂賞	大学院工学研究科教授	馬場 嘉信	
H28.11.11	土木学会 平成28年度全国大会 第71回年次学術講演会 優秀講演者	大学院工学研究科准教授	中井健太郎	
H28.11.11	土木学会 平成28年度全国大会 第71回年次学術講演会 優秀講演者	大学院工学研究科准教授	中村 友昭	
H28.11.11	土木学会 平成28年度全国大会 第71回年次学術講演会 優秀講演者	大学院工学研究科助教	趙 容桓	
H28.11.12	平成28年度 公益信託 日本白血病研究基金 一般研究清水賞	大学院医学系研究科教授	清井 仁	
H28.11.12	日本シミュレーション&ゲーミング学会 優秀賞	大学院環境学研究科 寄附講座講師	本巢 芽美	
H28.11.13	第14回（2016年度）日本時間生物学会奨励賞	環境医学研究所助教	小野 大輔	
H28.11.13	UTECH (The University of Tokyo Edge Capital) Venture Partner Program 2016 最優秀賞	大学院理学研究科特任助教	野田口理孝	丹羽優喜（大学院理学研究科研究員）、他4名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28.11.14	第5回石田賞（平成28年度）	大学院文学研究科特任講師	松井 裕美	
H28.11.17	平成29年度日本薬学会奨励賞	大学院創薬科学研究科助教	下川 淳	
H28.11.17	第23回日本神経内視鏡学会 会長賞	医学部附属病院医員	川端 哲平	
H28.11.17	Thomson Reuters Highly Cited Researchers	大学院理学研究科教授	野尻 伸一	
H28.11.18	Young Investigator Clinical Research Abstract Award, Society for Neuro-Oncology	大学院医学系研究科助教	大岡 史治	
H28.11.20	Commendation Award, 2016 ASPE Asia-Pacific Conference	医学部附属病院准教授	阿部 恵子	安井浩樹（大学院医学系研究科寄附講座准教授）、内山 靖（大学院医学系研究科教授）、淵田英津子（大学院医学系研究科准教授）、他2名と連名
H28.11.20	Excellent Poster Award, The 17th International Machine Tool Engineers' Conference	大学院工学研究科准教授	鈴木 教和	池田遼輔（大学院工学研究科 M2）、社本英二（大学院工学研究科教授）と連名
H28.11.21	DPS Nishizawa Award, International Symposium on Dry Process 2016	名誉教授	菅井 秀郎	
H28.11.25	日本放射線腫瘍学会	医学部附属病院助教	岡田 徹	他16名と連名
H28.11.26	第58回日本感染症学会 中日本地方会 学術集会 学術奨励賞（臨床部門）	大学院医学系研究科特任助教	井口 光孝	八木哲也（大学院医学系研究科教授）、他7名と連名 ※愛知県院内感染対策ネットワークとして受賞
H28.11.28	First Air Liquide Awards, Essential Small Molecules 2016	大学院工学研究科教授	松田亮太郎	
H28.11.29	平成28年度 第21回プラズマ・核融合学会 学術奨励賞	大学院理学研究科助教	前山 伸也	
H28.12. 1	日本粉体工業技術協会奨励賞 研究奨励賞	大学院工学研究科准教授	山本 徹也	
H28.12. 2	Cold Spring Harbor Asia Fellowship Award	大学院生命農学研究科研究員	岡本 暁	
H28.12. 3	HAI シンポジウム2015 Impressive Poster Award	未来社会創造機構 特任准教授	田中 貴紘	米川 隆（未来社会創造機構研究員）、山岸未沙子（未来社会創造機構特任助教）、稲上 誠（未来社会創造機構研究員）、他3名と連名
H28.12. 7	Young Researcher Award, Division of Plasma Physics, Association of Asia Pacific Physical Societies	大学院理学研究科准教授	井上 剛志	
H28.12. 8	2016年度 ヒューマンコミュニケーション賞（電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎（HCS）研究会）	大学院情報科学研究科准教授	川合 伸幸	中神明子（大学院情報科学研究科研究員）、他4名と連名

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28. 7. 2	2016年度 第11回 アクテリオン アカデミア プライズ	医学部附属病院 臨床検査技師	菊地 良介	
H28. 8.20	第11回 Vascular Biology Innovation Conference (VBIC) 発表優秀賞	医学部附属病院 臨床検査技師	菊地 良介	
H28. 9. 2	2016年度 日本臨床検査医学会 若手研究者奨励賞	医学部附属病院 臨床検査技師	菊地 良介	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28. 3.25	日本化学会 東海支部長賞	大学院理学研究科 M2	酒向 優佑	
H28. 5.17	IOS AWARD	大学院工学研究科 D2	池端 信哉	渡邊理智（大学院工学研究科 M2）、中村 光（大学院工学研究科教授）と連名
H28. 5.31	日本地球惑星科学連合2016年大会 宇宙惑星科学セッション 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	徐 何秋岑	
H28. 6.13	Donald M. Ernst Award, Joint 18th International Heat Pipes Conference and 12th International Heat Pipe Symposium	大学院工学研究科 D1	小田切公秀	長野方星（大学院工学研究科教授）と連名
H28. 7. 8	日本コンクリート工学会 第38回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞	大学院工学研究科 D2	付 李	
H28. 7. 8	日本コンクリート工学会 第38回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞	大学院工学研究科 M2	伊佐治 優	
H28. 9. 2	日本航空宇宙学会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	吉水 大介	青木勇磨（大学院工学研究科 M2）、岩川 輝（大学院工学研究科講師）、佐宗章弘（大学院工学研究科教授）、他2名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M1	永井 美帆	
H28. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M1	渡邊 健太	
H28. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M1	林 卓矢	
H28. 9. 5	電気学会 平成27年 基礎・材料・共通部門 表彰	大学院工学研究科 M2	高橋 達也	
H28. 9. 6	2016年日本液晶学会討論会 虹彩賞	大学院工学研究科 M2	仲井 崇	
H28. 9. 7	日本セラミックス協会 第29回秋季シンポジウム特定セッション 「誘電材料の新展開」 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	松尾 翔吾	
H28. 9. 8	Poster prize, The 6th International IUPAC Conference on Green Chemistry	大学院理学研究科 D3	高田 雄貴	
H28. 9. 9	第15回情報科学技術フォーラム FIT2016 FIT 奨励賞	大学院情報科学研究科 D3	河畑 則文	
H28. 9. 9	第15回情報科学技術フォーラム FIT2016 FIT 奨励賞	大学院工学研究科 M2	河崎 光毅	
H28. 9.10	日本地質学会 第123年学術大会優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 M1	守法 亮佑	竹内 誠 (大学院環境学研究科教授)、 山本鋼志 (大学院環境学研究科教授) と 連名
H28. 9.10	社会情報学会 2016年 年度論文奨励賞佳作	大学院情報科学研究科 M2	荻島 和真	福安真奈 (大学院情報科学研究科 D3)、 遠藤 守 (大学院情報科学研究科准教授)、 安田孝美 (大学院情報科学研究科教授)、 他 1名と連名
H28. 9.11	第3回 日本鉄バイオサイエンス 学会学術奨励賞	大学院医学系研究科 D1	伊藤 文哉	
H28. 9.11	平成28年度錯体化学会 第66回討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	倉知 由季	
H28. 9.11	平成28年度錯体化学会 第66回討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	四坂 勇磨	
H28. 9.12	日本地質学会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 M1	村宮 悠介	吉田英一 (博物館教授) と連名
H28. 9.12	日本機械学会 機素潤滑設計部門 第22回卒業研究コンテスト 最優秀発表	大学院工学研究科 M1	根本 公紀	
H28. 9.12	日本機械学会 機素潤滑設計部門 第22回卒業研究コンテスト 最優秀発表	大学院工学研究科 M1	野田啓一郎	
H28. 9.12	日本機械学会 機素潤滑設計部門 第22回卒業研究コンテスト 優秀発表	大学院工学研究科 M1	亀田衣麻莉	
H28. 9.14	第9回 Web とデータベースに関するフォーラム (WebDB Forum 2016) 最優秀論文賞	大学院情報科学研究科 D2	山口 晃広	佐藤健哉 (大学院情報科学研究科特任教授)、 中本幸一 (大学院情報科学研究科特任教授)、 石川佳治 (大学院情報科学研究科教授)、 本田晋也 (大学院情報科学研究科准教授)、 高田広章 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H28. 9.14	第53回アイソトープ・放射線研究発表会 若手優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	寺林 稜平	
H28. 9.15	第41回日本医用マックスペクトル学会 若手優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M1	上田 裕子	上山 純 (大学院医学系研究科准教授)、 他 1名と連名
H28. 9.15	国際黄金色藻シンポジウム Best Student Poster Presentation Runner-Up	大学院環境学研究科 D2	加藤 悠爾	
H28. 9.15	日本オペレーションズ・リサーチ学会 学生論文賞	大学院情報科学研究科 M2	澤井 佑樹	
H28. 9.16	第58回天然有機化合物討論会 奨励賞	大学院創薬科学研究科 D3	前原 知明	
H28. 9.16	第65回高分子討論会 高分子学会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	川端 賢	
H28. 9.19	第25回有機結晶シンポジウム 最優秀講演賞	大学院理学研究科 D2	水野 麻人	
H28. 9.24	日本農芸化学会中部支部 第177回例会 学術奨励賞	大学院創薬科学研究科 D3	島崎 嵩史	
H28. 9.24	第22回日本腹膜透析医学会学術集会・総会 Young Investigator 賞	大学院医学系研究科 D4	狩谷 哲芳	
H28. 9.24	スケジューリング学会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	水野竜太郎	
H28. 9.24	スケジューリング学会 学術賞	大学院情報科学研究科 M2	澤井 佑樹	胡艶楠 (大学院情報科学研究科助教)、 吳 偉 (大学院情報科学研究科 D3)、 柳浦睦憲 (大学院情報科学研究科教授)、 他 3名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28. 9.28	日本物理学会 2016年秋季大会領域10 学生奨励賞	大学院理学研究科 D1	永井 隆之	
H28. 9.30	1st place winner, The International Society for Industrial Ecology Conference Poster Competition, ISIE SEM-AP 2016 NAGOYA 2016	大学院環境学研究科 M1	野中 一鴻	
H28.10. 3	第51回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム 若手奨励賞	大学院理学研究科 M1	山岸 美保	
H28.10. 5	Outstanding Presentation Award, EcoBalance 2016	大学院環境学研究科 D2	吉田 圭介	
H28.10. 6	第10回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres ンポスターセッション 優秀賞	大学院医学系研究科 M2	鈴木 杏	竹田有花 (医学部保健学科4年)、馬場竜子 (大学院生命農学研究科 D3)、平山正昭 (大学院医学系研究科准教授)、他2名と連名
H28.10. 7	第51回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 彩華	
H28.10. 9	Poster Award, The 9th Congress of the Asian-Pacific Society on Thrombosis and Hemostasis	大学院医学系研究科 M1	橋本恵梨華	高木夕希 (大学院医学系研究科 D3)、河村奈美 (大学院医学系研究科 M2)、横山愛弓 (大学院医学系研究科 M2) と連名
H28.10. 9	日本機械学会 第25回設計工学・システム部門講演会 優秀講演表彰	大学院工学研究科 M2	花田 萌美	飯盛浩司 (大学院工学研究科助教)、高橋 徹 (大学院工学研究科准教授)、松本敏郎 (大学院工学研究科教授) と連名
H28.10.14	第16回日本神経内分泌学会 学術集会 若手研究奨励賞	大学院医学系研究科 D4	笠井 貴敏	
H28.10.14	Best Poster Award, The 13th International Conference on Atomically Controlled Surfaces, Interfaces and Nanostructures (EPL)	大学院工学研究科 D1	服部 綾実	
H28.10.14	日本セラミックス協会 第36回エレクトロセラミックス研究討論会 奨励賞	大学院工学研究科 M1	松尾 翔吾	
H28.10.15	第78回日本血液学会学術集会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M1	坂根 寛人	
H28.10.15	第3回サイレント音声認識ワークショップ 学生奨励賞	大学院情報科学研究科 D1	田尻 祐介	
H28.10.16	Best Paper Award, Journal Publications and Research Consultancy Private Limited (TJPRC)	大学院経済学研究科 D3	楊 成寧	
H28.10.19	Best Paper Award, The 12th IEEE 2016 BioMedical Circuits and Systems Conference	大学院工学研究科 M1	小林 敦希	池田 景 (大学院工学研究科 M1)、中里和郎 (大学院工学研究科教授)、新津葵一 (大学院工学研究科講師) と連名
H28.10.21	Poster Award, 20th International Symposium on Advanced Display Materials and Devices (ADMD2016)	大学院工学研究科 M2	野田玲央奈	
H28.10.21	Poster Award, 20th International Symposium on Advanced Display Materials and Devices (ADMD2016)	大学院工学研究科 M1	大塚 祐実	
H28.10.22	第51回セントラル硝子国際建築設計競技 優秀賞	大学院環境学研究科 M1	藤枝 大樹	
H28.10.22	第51回セントラル硝子国際建築設計競技 優秀賞	大学院環境学研究科 M1	北村 将	
H28.10.22	第51回セントラル硝子国際建築設計競技 優秀賞	大学院環境学研究科 M1	山下 尚行	
H28.10.26	SINOPEC Best Poster Award, 4th International Conference on Molecular Simulation (ICMS2016)	大学院情報科学研究科 D2	松本健太郎	
H28.10.29	第64回レオロジー討論会 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	平山 貴也	山本哲也 (ナショナルコンポジットセンター助教)、増淵雄一 (ナショナルコンポジットセンター教授) と連名
H28.10.30	日本病院薬剤師会 東海ブロック・日本薬学会 東海支部合同学術大会2016 ベストプレゼン賞	大学院創薬科学研究科 M2	清水 貴央	
H28.10.30	第29回日本トレーニング科学会 トレーニング科学会研究賞 奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D1	小川まどか	吉子彰人 (大学院医学系研究科 D3)、秋間 広 (総合保健体育科学センター教授) と連名
H28.11. 1	日本グループ・ダイナミクス学会 2016年度 優秀学会発表賞 English Session 部門	大学院教育発達科学研究科 D2	徐 文臻	高松礼奈 (大学院教育発達科学研究科 D3)、高井次郎 (大学院教育発達科学研究科教授)、他3名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28.11. 1	The Best Article in Separation and Transport Phenomena Topic, The 3rd International Seminar on Fundamental and Application of Chemical Engineering	大学院工学研究科 D2	チョー キムテット	ワーディオノ(工学部・工学研究科技術補佐員)、 神田英輝(大学院工学研究科助教)、 後藤元信(大学院工学研究科教授)と連名
H28.11. 2	Excellent Poster Award, The 7th A3 Symposium on Emerging Materials	大学院工学研究科 D3	安西 智洋	
H28.11. 4	Best Paper Award, IEEE-ITSC 2016	大学院情報科学研究科 M2	涂 晨曦	竹内栄二郎(大学院情報科学研究科准教授)、 宮島千代美(未来社会創造機構特任准教授)、 武田一哉(大学院情報科学研究科教授)
H28.11. 9	Journal of Endocrinology Award 2016	大学院理学研究科 D2	池田 宗樹	
H28.11.10	Best Student Paper Award, ProvSec 2016	大学院工学研究科 M2	今村 和弥	岩田 哲(大学院工学研究科准教授)と 連名
H28.11.11	有機合成化学協会 第110回有機合成シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院創薬科学研究科 D2	野村 俊宗	
H28.11.12	Basic Science Young Investigator Travel Awards, American Association for the Study of Liver Diseases Foundation (AASLD Foundation)	大学院医学系研究科 D3	伊藤 隆徳	
H28.11.12	人文地理学会 第16回(2016年)人文地理学会賞論文部門	大学院環境学研究科 D3	崎田誠志郎	
H28.11.15	軽金属学会東海支部ポスター講演会 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	朱 麗璋	
H28.11.15	第47回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 VIP 賞	大学院創薬科学研究科 D3	前原 知明	
H28.11.15	第47回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 優秀賞	大学院工学研究科 M2	小枝きらら	ウヤヌクムハメット(大学院工学研究科助教)、 石原一彰(大学院工学研究科教授)と連名
H28.11.19	SFRR ASIA Travel Award 2016 (Society for Free Radical Research Asia)	大学院医学系研究科 D3	大原 悠紀	
H28.11.22	第35回固体・表面光化学討論会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D3	杉岡 大輔	
H28.11.24	2016年電気化学会北海道支部・東海支部合同 シンポジウム 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	米元 文洋	
H28.11.24	2016年電気化学会北海道支部・東海支部合同 シンポジウム 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	高瀬 駿	
H28.11.26	第53回日本航空宇宙学会中部・関西支部合同 秋期大会 最優秀学生賞	大学院工学研究科 M1	竹並 浩輝	
H28.11.26	第53回日本航空宇宙学会中部・関西支部合同 秋期大会 中部支部学生賞	大学院工学研究科 M1	富岡 拓也	
H28.11.26	Poster Award, 2nd International Conference on Photoalignment and Photopatterning in Soft Materials (PhoSM2016)	大学院工学研究科 M2	野田玲央奈	
H28.11.26	Poster Award, 2nd International Conference on Photoalignment and Photopatterning in Soft Materials (PhoSM2016)	大学院工学研究科 M1	永井 美帆	
H28.11.30	Student Paper Award, 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2016)	大学院工学研究科 M1	中島 康雄	
H28.11.30	Best Poster Award, 2016 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Sciences (MHS2016)	大学院工学研究科 D3	ハイルラズワン ハシム	丸山央峰(大学院工学研究科准教授)、 益田泰輔(大学院工学研究科特任准教授)、 新井史人(未来社会創造機構教授)と連名
H28.11.30	Best Poster Award, 2016 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Sciences (MHS2016)	大学院工学研究科 M2	笠井 宥佑	佐久間臣郎(大学院工学研究科助教)、 早川 健(未来社会創造機構特任助教)、 新井史人(未来社会創造機構教授)と連名
H28.12. 1	電子情報通信学会 高信頼制御通信研究専門 委員会 ベストポスター賞	大学院工学研究科 D1	小倉 貴志	
H28.12. 1	地球電磁気・地球惑星圏学会 学生発表賞(オーロラメダル)	大学院工学研究科 M2	竹生 大輝	
H28.12. 1	第31回画像符号化シンポジウム・第21回映像 メディア処理シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 D1	藤田 秀	
H28.12. 1	第31回画像符号化シンポジウム・第21回映像 メディア処理シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 M1	植本 悠介	
H28.12. 1	第31回画像符号化シンポジウム・第21回映像 メディア処理シンポジウム ベストポスター賞	大学院工学研究科 M1	美川 翔	
H28.12. 1	第21回映像メディア処理シンポジウム 学生論文賞	大学院工学研究科 M1	小林 優斗	
H28.12. 2	日本中性子科学会 第16回年会 ポスター賞	大学院工学研究科 M2	猿渡 康治	
H28.12. 5	表面技術協会 中部支部 若手奨励賞	大学院工学研究科 M2	鷲見 英	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28.12. 5	高分子学会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 D1	石立 涼馬	
H28.12. 5	高分子学会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	石川 智大	
H28.12. 5	高分子学会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	石橋 遼真	
H28.12. 6	触媒学会日本支部 第26回キャラクターゼーション講習会 優秀研究賞	大学院工学研究科 M1	大島 正己	
H28.12. 7	3rd Place Poster Award, The 10th Asian Meeting on Electroceramics-2016 (AMEC-2016)	大学院工学研究科 M2	海老原洋平	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業-第6回CSJ化学フェスタ2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	小林 裕	
H28.12.10	日本セラミックス協会 東海支部学術研究発表会 最優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	丸山 莉果	
H28.12.15	第20回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト最優秀賞	大学院情報科学研究科 M1	谷川 右京	前田高志 (工学部4年)、高橋和馬 (大学院情報科学研究科 M2) と連名
H28.12.15	第20回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト優秀賞	大学院情報科学研究科 M1	滝本 広樹	児玉祐樹 (工学部4年)、新保祐人 (大学院情報科学研究科 M2) と連名
H28.12.15	2016年度日本原子力学会中部支部 奨励賞	大学院工学研究科 M1	松尾 翔吾	
H28.12.15	2016年度日本原子力学会中部支部 奨励賞	工学部4年	岡本 一輝	

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 丸山彰一医学系研究科教授らのグループは急速進行性糸球体腎炎の治療に、骨髄やiPS細胞で作ったマクロファージが効果を発揮することを発見	11.16 (水)	中日 (朝刊)
2 本学は文部科学省の国立大学法人評価委員会に「障害者にも配慮したキャンパスのガイドラインを定めた」など「特筆すべき進捗状況にある」と最高評価を受けた	11.16 (水)	日経 (朝刊)
3 環境学研究科附属地震火山研究センターと長野県は、御嶽山の麓で火山活動などを観測する研究施設を来年夏に設置	11.16 (水) 11.17 (木)	日経 (朝刊) 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
4 本学で名古屋国税局局長垣水純一氏が「税務行政の現状と課題」と題して講演し、大前文乃さん経済学部2年生は、「変化する環境に対応していくことで、グレーゾーンを減らすことが大切だと思った」と語る	11.16 (水)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
5 本学と日本貿易振興機構名古屋貿易情報センター、愛知県は「グローバルビジネス戦略立案ワークショップ」開催：16日	11.17 (木)	中部経済
6 平成28年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰：浅井陽次医学部附属病院看護師	11.17 (木)	読売
7 産業化戦略に軸足 飯島澄男本学特別招へい教授がカーボンナノチューブを発見してから25年 市場性見極め国際競争力	11.17 (木)	日刊工業
8 紙つぶて：田舎時間 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	11.17 (木)	中日 (夕刊)
9 中日新聞130周年記念トップインタビュー 松尾総長、東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社代表取締役社長石田建昭氏 グローバルな視点を持つ人材育成 中部地域の魅力のさらなる向上を	11.18 (金)	中日 (朝刊)
10 名古屋大学・「ウェルビーイング in アジア」・PwC Japan グループ HeForShe セミナー「ダイバーシティと女性のリーダーシップの促進」開催：17日 敷下ももこさん本学大学院1年生は「ジェンダー問題は女性に焦点を当てた考え方が日本では根強いが、男性側の役割やメリットを考えていく必要がある」と語る	11.18 (金)	中日 (朝刊)
11 本学は2017年度の入学者募集要項を発表	11.18 (金)	中日 (朝刊)
12 本学や東京大学、慶應義塾大学の研究グループは、完全自動運転車を早期に市街地で実用化するため、新たなシステム開発に乗り出した	11.19 (土)	朝日 (朝刊)
13 今さら聞けない+：性別 人の体の「原型」は女性？ 田中 実理学研究科教授は性同一性障害について「身長が違いうように、性も典型的な男性、女性から広がりを持っている」と語る	11.19 (土)	朝日 (朝刊)
14 公害環境問題講演会「熊本地震の教訓を生かすー原発と活断層、新規制基準をめぐって」開催：26日 鈴木康弘減災連携研究センター教授が講演	11.19 (土)	中日 (朝刊)
15 かがくゼミナール「立体臓器モデルを作ろう」開催：12月23日 講師 森 健策情報戦略室教授、伊神 剛医学部附属病院病院講師	11.19 (土)	中日 (朝刊)
16 第69回全日本合唱コンクール全国大会：金賞 鳥取市教育委員会教育長賞 名古屋大学コール・グランツェ	11.19 (土) 11.20 (日)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
17 名古屋大学レクチャー2016「持続可能な社会への道ー戦後郊外の歴史的教訓からー」開催：19日 滋賀大学名誉教授宮本憲一氏本学卒業生が講演し、「将来の地球環境のためには持続可能な社会づくりが重要だ」と語る	11.20 (日)	中日 (朝刊)
18 植田美那子トランスフォーメティブ生命分子研究所特任講師らの研究グループは、植物の受精卵が細胞分裂を始める際の仕組みの一部を突き止めた	11.22 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
19 中部経済特集⑤：大学発VB 本学も講座「Tongali (とんがり) プロジェクト」を始めるなどし、松尾総長は「少しずつ起業を考える学生が出始めている」と語る	11.22 (火)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年11月16日～12月15日]

記事	年月日	新聞等名
20 本学は人文学研究科長に佐久間淳一文学研究科教授を選出	11.22 (火)	中日 (朝刊)
21 学生 eye : 鬼役で舞い「感無量」佐々木重洋文学研究科教授が開く「花祭りゼミ」の有志5人が東栄町小林地区の「花祭り」に参加	11.22 (火)	中日 (朝刊)
22 水野貴正総合保健体育科学センター講師と中京大学は、頭に弱い電気刺激を加えると足首を曲げやすくなることを発見	11.22 (火)	読売
23 天野 浩未来材料・システム研究所教授と物質・材料研究機構理事小出康夫氏本学卒業生が「天野・小出共同研究ラボ」を本学と同機構に設置することを発表し、天野教授は「小出先輩とまた一緒に仕事できることになり感慨深い」と語る	11.23 (水) 11.28 (月) 12.11 (日)	中日 (朝刊) 他3社 日経 (朝刊) 読売
24 タイのチュラポーン王女殿下が本学を訪れ、同国で開校準備が進められているチュラポーン王女殿下医科大学との学術交流について協議した	11.23 (水) 12. 1 (木) 12. 5 (月)	中日 (朝刊) 日刊工業 日刊工業
25 本学とパナソニック株式会社は共同で、屋内型歩行支援ロボットを開発	11.23 (水)	日刊工業
26 鷺谷 威滅災連携研究センター教授は、22日に発生した福島県沖地震が南海トラフ巨大地震を誘発する可能性について「直接は関係ない」との考えを示した	11.23 (水)	中日 (朝刊)
27 日東学術振興財団2016年度助成先贈呈式：向井康人工学研究科准教授ら53人の研究や海外派遣が対象となった	11.23 (水)	日経 (朝刊)
28 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は安倍首相にベースアップを要請されたことに対して「円高で上期は厳しい企業も下期は持ち直してくるだろうが、ベアができる企業とそうでないところがある」と語る	11.23 (水)	中日 (朝刊)
29 野依良治本学特別教授、小林 誠同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授がスウェーデン大使公邸で開かれた東京工業大学栄誉教授大隅良典氏のノーベル賞を祝う祝賀会に出席	11.24 (木)	日経 (朝刊)
30 紙つづて：出前授業 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	11.24 (木)	中日 (夕刊)
31 遺伝子実験施設公開セミナー「身近な小動物から見えてくる私たちの遺伝子とその進化」開催：12月6日 松田洋一生命農学研究科教授が「染色体から読み解く脊椎動物の進化」をテーマに講演	11.25 (金)	毎日 (朝刊)
32 講演会「原発事故から5年 臨床医から見たフクシマ」開催：12月4日 鶴友会館で行われる	11.25 (金)	中日 (朝刊)
33 プロ棋士藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生が愛知県知事大村秀章氏を訪問	11.25 (金) 11.26 (土)	読売 中日 (朝刊)
34 第36回 全日本実業団対抗 女子駅伝競走大会：リハビリ中で予選会を欠場した日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生が出場の見込み	11.26 (土)	毎日 (朝刊)
35 私見卓見：減災のこと、本音で話そう 福和伸夫滅災連携研究センター教授	11.28 (月)	日経 (朝刊)
36 第36回 全日本実業団対抗 女子駅伝競走大会：優勝 日本郵政グループ 2区で走った鈴木亜由子氏本学卒業生は「きょうの私は流れをキープしただけ。今持っている力は出せた」と語る	11.28 (月)	中日 (朝刊)
37 スマイル：採用の現場で役割を追求 株式会社生方製作所マネジメントセンター人事グループ山崎沙織氏本学卒業生	11.28 (月)	中部経済
38 産学共創のステージへ (1)：本学が中心となり文部科学省・科学技術振興機構の2016年度の新事業「産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム (OPERA)」に採択されたコンソーシアムが取り上げられる	11.29 (火)	日刊工業
39 長田和雄環境学研究科准教授の指導を受け、滝高等学校先進技術研究部が大気汚染に関する研究を続けている	11.29 (火)	中日 (朝刊)
40 名古屋大学交響楽団定期演奏会開催：12月11日	11.29 (火)	中日 (朝刊)
41 大学トップマネジメントフォーラム2016 紙上採録 第3部パネルディスカッション 松尾総長 大学のグローバル化には国際交流の強化が必要	11.29 (火)	朝日 (朝刊)
42 大学トップマネジメントフォーラム2016 名古屋大学 国際化を推進して世界屈指の研究大学へ 松尾総長	11.29 (火)	朝日 (朝刊)
43 講演会「日本の『近代』と『戦後民主主義』～戦後つくられた『福沢諭吉神話』」開催：12月4日 安川寿之輔本学名誉教授が講演	11.29 (火)	中日 (夕刊)
44 中日新聞「リンクト」：HUMAN'S EYE 行動計画に裏打ちされた、強いリーダーシップが必要。 松尾総長	11.30 (水)	中日 (朝刊)
45 中日新聞「リンクト」：PROJECT LINKED 協力機関 医学部附属病院	11.30 (水)	中日 (朝刊)
46 産学共創のステージへ (2)：知能機械との融合社会システム 本学が幹事機関の「人間機械協奏技術コンソーシアム」では、人工知能などを組み込む知能機械と、人間の共生社会システムの研究・開発を進める	11.30 (水)	日刊工業
47 本学は日経 BP コンサルティング「大学ブランド・イメージ調査2016～17 (北陸・東海編)」で9年連続の首位となった	11.30 (水)	日経 (朝刊)
48 電気通信大学が公開シンポジウム「第4回ユニーク&エキサイティング・リサーチ・シンポジウムー研究力強化に向けた組織的な連携の在り方ー」開催：12月2日 本学が産学連携の実績などを紹介する	11.30 (水)	日刊工業
49 第25回国際高校生選抜書展：入選 野田結愛さん教育学部附属高等学校1年生	11.30 (水)	毎日 (朝刊)
50 取材ノート：試練乗り越え 再び前へ 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生は「笑顔で今季を締めくくることができて良かった」と語る	11.30 (水)	中日 (朝刊)
51 本学が企業や行政と連携し、外国人留学生の就職活動支援に本格的に取り組む 留学生受け入れ数の多い大学10位 名古屋大学	12. 1 (木)	日経 (朝刊)
52 紙つづて：高級食器 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	12. 1 (木)	中日 (夕刊)
53 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生のデビュー戦の相手が、現役最年長の加藤一二三九段に決まった	12. 2 (金) 12. 3 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
54 産業春秋：全日本実業団女子対抗駅伝で優勝した日本郵政グループの鈴木亜由子氏本学卒業生はレース前に「昨年の12位を上回ることが目標」と話していた	12. 2 (金)	日刊工業
55 医学系研究がスウェーデン・ルンド大学と共同で、医学の四年制博士課程プログラムを開設すると発表	12. 3 (土)	中日 (朝刊)
56 神田光郎医学部附属病院助教らのグループは、胃がんの転移による疾患である腹膜播種でがん細胞の働きと関係が深い分子を突き止めた	12. 4 (日)	中日 (朝刊)
57 病院の実力：肝臓がん 医学部附属病院の治療実績が取り上げられる	12. 4 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
58 角皆 潤環境学研究科教授、中川書子同准教授らのグループが桜島の噴気温度の遠隔測定に成功	12. 5 (月) 12.14 (水)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊)
59 備える3.11災前の策：第134回「復興」を考えたまちづくり 福和伸夫減災連携研究センター教授は「災害後に早期に復興するためには、合意形成が鍵だ。それを平時から考えておくことが重要」と語る	12. 5 (月)	中日 (朝刊)
60 「未来につなげる・東海ネット 市民放射能測定センター」五周年報告会と記念講演会「原発事故から5年 臨床医から見たフクシマ」開催：4日 鶴友会館で行われた	12. 5 (月)	中日 (朝刊)
61 村松秀城医学部附属病院助教らのグループは、再発すると死亡率が高くなる「小児急性リンパ性白血病」で、再発を起こす白血球細胞を高い確率で見つける診断法を開発した	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
62 博物館コンサート NUMCo「フルート・トリオが贈るクリスマスコンサート」開催：10日	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
63 水野正明医学部附属病院教授は第3回メディカルメッセの開催に先立ち「世界をリードする医療機器の中身は多くが日本製。部品や技術はあるのにそれを束ねる力がなかった」と語る	12. 7 (水)	中日 (朝刊)
64 福和伸夫減災連携研究センター教授は愛知県建設部建築局長尾崎智央氏と防災をテーマに対談し「愛知県はこの国を守るための将来像を示し、リーダーシップをとって対策を進めていかなくてはなりません」と語る	12. 7 (水)	中日 (朝刊)
65 拓く研究人 (144)：自己組織化でモノづくり 鳴瀧彩絵工学研究科准教授	12. 7 (水)	日刊工業
66 Culture：サントリー学芸賞今年2作 名古屋大学出版会 丁寧な編集 幅広い信頼	12. 7 (水)	中日 (朝刊)
67 四十路の基 入門記者の初歩講座：大学での授業 本学で囲碁の授業が行われたことが取り上げられる	12. 7 (水)	中日 (夕刊)
68 メッセナゴヤ実行委員会と一般社団法人未来マトリクスはマッチング企画「学生のアイデアで新製品、作ってください」を開催し宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「今回の発表会は、企業のみなさんに対する挑戦状といえる。隠された良さを見つけるのが大人の役割。心を柔らかくして」と語る	12. 8 (木)	中部経済
69 第3回メディカルメッセ開催：7、8日 松尾総長が見学し、水野正明医学部附属病院教授が基調講演	12. 8 (木)	中部経済
70 紙つづて：市場競争 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	12. 8 (木)	中日 (夕刊)
71 論点：ノーベル賞と基礎研究 成果を狙ってばかりでは… 益川敏英本学特別教授	12. 9 (金)	毎日 (朝刊)
72 学校法人市邨学園は名古屋経済大学と同短期大学の学長に佐分晴夫本学名誉教授を選出	12. 9 (金)	中日 (朝刊)
73 医学系研究科と岐阜薬科大学が創薬研究を中心に共同研究や研究者交流促進を目的に連携協定を結んだ	12.10 (土)	中部経済 中日 (朝刊)
74 起業家魂第2部 (9)：APTJ本学発ベンチャー企業 同会長高田広章未来社会創造機構教授	12.10 (土)	毎日 (朝刊)
75 学生の発想×企業の技術 東海で進む商品開発の試み 未来マトリクス顧問宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「中小企業と学生、両者が組んで、先端的にもものづくりができる地域にしたい」と語る	12.10 (土)	朝日 (朝刊)
76 のよりサロン：「欠乏という豊かさ」資源ない国が変革生む 野依良治本学特別教授が本学学生と議論を交わす	12.11 (日)	中部経済
77 野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授 成果偏重に危機感	12.11 (日)	中日 (朝刊)
78 ミュー粒子は巨大な建造物でも透過できる 森島邦博未来材料・システム研究所特任助教など本学が参加する国際チームがピラミッドの探査に使い、未知の空間が存在する可能性を突き止めた	12.11 (日)	日経 (朝刊)
79 東日本大震災 教訓生かそう 中小企業 高まる意識 都築充雄減災連携研究センター寄附研究部門准教授 事業継続家庭の備えも重要	12.11 (日)	中日 (朝刊)
80 デスクの眼：地域が潤う再生エネを 丸山康司環境学研究科教授は、日本でも再生エネの必要性は理解されているものの、音や景観、バードストライクなどの問題で風力発電への反対は根強いと指摘	12.12 (月)	中日 (夕刊)
81 「中根」の目 データが語る：JRへの就職者数 東海旅客鉄道株式会社は本学や岐阜大学が上位	12.13 (火)	毎日 (朝刊)
82 大学発VB設立 二極化 過去10年「増えた」39%「増えていない」52% 日本経済新聞社が行った大学発ベンチャー企業に関するアンケートに松尾総長が回答	12.14 (水)	日経 (朝刊)
83 日口協調 100年前の姿 ロシア出身のサヴェリエフ・イゴリ国際開発研究科准教授がロシア革命前に現地で活躍した日赤看護班日本人について研究を進めている	12.14 (水)	中日 (朝刊)
84 この人：名古屋学芸大学の新学長杉浦康夫氏本学名誉教授	12.15 (木)	中日 (朝刊)
85 教育@とうかい：スーパーグローバルハイスクール 教育学部附属中学・高等学校	12.15 (木)	読売
86 紙つづて：日本のものづくりの伝統 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	12.15 (木)	中日 (夕刊)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
1月24日(火) 場 所：情報基盤センター4階演習室 時 間：13:00～14:30 定 員：40名 対 象：一般 参 加 費：無料	平成28年度第10回情報連携統括本部 公開講演会・研究会 講演題目：「横浜国大における ITIL 導入の取り組み」 講 演 者：田名部元成氏 (横浜国立大学教授)
[問い合わせ先] 情報推進部情報推進課 052-789-4352	

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月25日(水)

場 所：青少年ひろば (7th CAFE)
(名古屋市中区)
時 間：18:30~20:00
定 員：30名
対 象：中学生以上、一般
参 加 費：500円 (ワンドリンク付き)

第70回名大カフェ “Science, and Me”

講演題目：『『藻類でバイオ燃料をつくるはなし』はどこまで進んだか』
講 演 者：小俣達男 (生命農学研究科教授)
内 容：クリーンエネルギーとして期待されながら、なかなか進まない
微細藻類を用いたバイオ燃料生産の実用化を進める研究の
成果と、明らかになった実用化への道筋について解説する



[問い合わせ先]

学術研究・産学官連携推進本部
リサーチ・アドミニストレーター
戸次真一郎 052-747-6791

1月27日(金)

場 所：野依記念学術交流館2階
カンファレンスホール
時 間：10:00~18:00
定 員：250名
対 象：有機合成化学やケミカル
バイオロジーに興味のある方
参 加 費：無料

第22回名古屋メダルセミナー (The 22nd Nagoya Medal of Organic Chemistry)

講演題目：「Palladium-Catalyzed Carbon-Heteroatom Bond-
Forming Reactions」、「Copper-Catalyzed Asymmetric
Hydrofunctionalization Processes in Organic Synthesis」
講 演 者：ステファン・L・バックワルド氏
(マサチューセッツ工科大学教授)
講演題目：「Ligand Design for Efficient Organic Synthesis」
講 演 者：澤村正也氏 (北海道大学教授)



[問い合わせ先]

トランスフォーマティブ
生命分子研究所 052-789-4999

1月30日(月)、31日(火)

場 所：研究所共同館II 3階ホール
時 間：10:30~ (1/30)、10:00~ (1/31)
定 員：50名
対 象：一般
参 加 費：無料

第29回宇宙地球環境研究所 年代測定研究シンポジウム

講演題目：「高圧・超高圧変成岩のフェンジャイト K-Ar 年代学」
講 演 者：板谷徹丸氏
(株式会社蒜山地質年代学研究所地質技術センター長)
講演題目：「鈴木和博先生を偲ぶ：微小領域微量分析から CHIME へ」
講 演 者：榎並正樹 (宇宙地球環境研究所教授)
講演題目：「KIGAM における加速器質量分析装置の学術的利用」
講 演 者：Wan Hong 氏
(韓国地質資源研究院 (KIGAM) 地質分析センター長)



[問い合わせ先]

宇宙地球環境研究所
基盤研究部門年代測定研究部
052-789-2579

表紙サークル紹介



表紙
定期演奏会のリハーサル
(吹奏楽団)
(平成28年11月26日)

吹奏楽団

私たち名古屋大学吹奏楽団 (通称なごすい) は、「音楽が好きなら誰でも大歓迎」な、吹奏楽を楽しむことをモットーにした楽団です。1年の集大成となる定期演奏会と、名大祭での演奏 (水無月の宴) の2回の演奏会を中心に活動しており、他にも、年に2回の身体障害者施設での演奏会などの有志による演奏会も行っています。ポップスからクラシックまで幅広い楽曲に挑戦し、ご来場いただいたみなさまに楽しんでいただける演奏会を目指して、日々練習に取り組んでいます。

名大トピックス No.284 平成29年1月16日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、受賞の掲載、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601) TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>) でもご覧いただけます。

177 ノーベル賞受賞者が集う1960年代

このコーナーでは、2008(平成20)年に小林 誠博士・益川敏英博士・下村 脩博士がノーベル賞を受賞した際、3人がともに在籍していた昭和30年代(1955~64年)の名大について取り上げました。

その後、2014年に赤崎 勇博士・天野 浩博士がノーベル賞を受賞しますが、これによってこの時代の名大史における重要性がさらにクローズアップされた感があります。

小林博士は、1963(昭和38)年に理学部へ入学し、72年に理学博士の学位を取得しました。益川博士は、1958年に理学部へ入学し、70年まで同学部の助手を務めました。1928年生まれの下村博士は、55年から2年半ほど理学部で研究活動を行い、60年に名大で理学博士号を取得した後、1963年から65年にかけて理学部助教授でした。

そして赤崎博士ですが、1981年に民間企業から工学部教授に就任した後、89年に青色LEDを実現し、これがノーベル賞の受賞理由となったことはよく知られています。

ただし実は、赤崎博士は30歳の1959年に民間企業から工学部助手となり、64年まで助教授として在籍しているのです(同年、名大で工学博士)。

また、2001年に現職の大学院理学研究科教授として、名大史上初のノーベル賞を受賞した野依良治博士も、29歳の若さで京大助手から名大理学部助教授に抜擢されています。

こうしてみると、名大のノーベル賞受賞者6人のうち5人がいずれも、研究者としての基礎を形成したり、あるいは伸び盛りの若い時期に、1960年代の名大に在籍していたことが分かります。もう1人の天野博士も、赤崎博士に見出され、若くして青色LEDを実現したことはご存じの通りです。

名大のノーベル賞続出の背景に、「自由闊達」な学風があるとよく言われますが、これと1960年代の関係はもっと研究されていくべきではないでしょうか。



1	2
3	4

- 1 大学院生時代の益川敏英特別教授と小林 誠特別教授。
- 2 名古屋大学時代の下村 脩特別教授。
- 3 第1期名古屋大学時代の赤崎 勇特別教授(中央)。
- 4 名古屋大学に移った頃の野依良治特別教授(前列中央)。